【　炎の竜と、さびしがりの霜刃　】　「唄う鳥・嘆く竜」シリーズ

行之泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【　炎の竜と、さびしがりの霜刃　】　「唄う鳥・嘆く竜」シリーズ

【Ｎコード】
Ｎ６８７７Ｐ

【作者名】
行之泉

【あらすじ】
【　唄う鳥・嘆く竜　】シリーズです。
魔法が使え、竜のいる中世ヨーロッパ調世界での話し。
少年の頃のザムゾンと、その代の『唄う鳥』との暖かな交流？の話になります。
ややＢＬチック部分があるると思われるので、ＢＬカテゴリーにしました。
一回の文章量は超短いです。

その1

轟々と燃え盛る焔。
少年は周囲を大きな火で囲まれながら呆然と立ち尽くしていた。
恐怖ではない。
驚愕でもない。
足が止まり動かない理由は、他にあった。
少年は、ただただ炎の美しさに魅せられていた。陶然とした瞳は、目前の炎に釘付けになっている。
「……きれいだ」
うっとりと呟く視線の先には、炎を手にした男性と、伝説の竜の姿があった。
竜の背後には発光するような光が見える。
言い知れぬ力の存在を感じる。
今まで見たなによりも圧倒的な力が目の前にある。
竜の中心から力が溢れ、少年のところまでその余波が届いている。
「満ちてくる。何かが僕の中に入ってくる」
注がれていく感覚を感じて少年は嬉しそうに目を細めた。
この力はこの世の理から開放され、自らが因果律を作り出せるようだ。
万能の力を持っているようにも思える。
「これが僕の求めていたものなのか」
少年は心を沸き立たせた。
力を持たず、何の特別な能力の無い少年は自分の心を空の器だと感じていた。
そして、これからの人生で何かの経験と他の人とは違う能力を器に入れて満たして行かなければならない。そんな風に思っていた。

それは生まれながらにそう感じるようになったのか、周囲の人間にそう思うように言われたからかのか判らない。
ただ気がつくと漠然とだが、何かで自分を満たさなければならない…と脅迫観念にも似た思いに駆られるようになっていた。
だが今まで器に何を入れればいいのか、何も見つからなかった。
何をやっても器用にこなし、そこそこは出来るようになっていたが、彼が夢中になるものは何もなかった。
身寄りの無い少年は叔母の宿屋を手伝い、子供の無い叔母夫婦の元でゆくゆくは宿屋の主人になるのだろうかとボンヤリ考えていた。
空の器を抱えたまま、心の空白を埋められず、この先生きていくのだろうかと漠然と考えていた矢先の出来事だった。
二人からかなり距離のあるこの場所でも、竜の力を浴び空の器を満たせば、自分も何か特別な術が使えるようになるように思えた。
哀しげな瞳をした男性は手の平に大きな炎を持ち、一歩一歩足を進めながら進行を邪魔するものに向って炎を投げつけていた。
炎は揺らめき、獲物を獲た猛獣のように対象物に絡み付き、それを炎で包む。
対象物は炎がつくと、ボッと大きな焔の柱に成長し一瞬にして灰に変化する。
目前とは言え近くはなく、走って逃げれば逃げ切れるほどの距離がある。だが少年は逃げようとは思わなかった。
むしろ近づいてもっと間近で見てみたいと熱望している。発せられる力を間近で受けたいと思う。
少年はこの風景を目に焼きつかせようと凝視する。勿体無くて目を瞑る事も出来ない。
熱さは感じるし、この場所が危険である事は判っている。
だが、物語の中に入ってしまったように感じて、まるで現実感がない。夢で見ている風景にも思える。
少年は幻想的な風景に見惚れ、ただその場で立ち尽くしていた。

その１（後書き）

ＢＬちっくな小説になる予定です。
不定期更新の予定。

その2

炎の柱が神殿の内部のあちらこちらで上がり、目の前には大人の肩に乗れそうな位の大きさのドラゴンと、炎を持つ男性。
伝説や物語でしか見たことの無い光景が広がっている。
現実感の無い風景。
まるで描かれた一枚の絵のように少年には思えた。
夢に見たような。
いつか何処かで見たような。
記憶には無いが、一種の懐かしさすら感じる光景だった。
客観的に考えると罪を犯した者が落とされる煉獄のようと、表現することも可能だ。
だが、少年にはそれが忌むべき恐ろしいものとは認識できなかった。
自分が待ち望んでいた事。
叶わない夢として描いていた事。
そんな事に思えていた。
全てを壊し無くしたいと思う、そんな破壊衝動が自分の中にあるとは思わなかったが…
目の前で繰り広げられている光景を甘やかな美しさとしか思えない。
自分はやはり頭がおかしいのだろう。
そんな感慨と共に少年はこの風景を目に焼き付けようとしていた。
整った男性の顔に表情はなく、冷酷に光る瞳の中に何故か哀しさを感じるのみだ。
男性が少年に気が付き、立ち止まった。
興味なさそうな酷薄な表情が動き、面白いものを見つけたような

顔になる。
立ち止まった男性の肩に、ドラゴンがヒラリと舞い降りた。
少年はドラゴンの羽ばたく翼の優美さや、真っ赤な妖しい瞳に目を奪われたままで動けない。
男性は手にした炎を持ち上げた。
大きく長く、剣のようにも蛇の舌のようにも見える炎が動いた。
少年のすぐ脇まで炎の先端が舐めるように揺らめき、飲み込もうとする。
咄嗟に後ずさる。
と、烈しい熱さを感じた後に、前髪がチリッと音を立てて嫌な匂いを発した。
そのままその場所に立っていたら、死にはしなくても大きな火傷くらいは負ったはずだ。
…ここは危ないかも知れない。
状況判断を冷静にして、少年はそう思ったが動けなかった。
否。
動きたくなかった。
一歩も動かずにいると、男は次に自分の持つ炎で自らを突いた。
男性が肩に乗せたドラゴンごと大きな炎で包まれる。
まるで炎の化身になったような姿。
男性は熱くないのか、苦悶の表情をする事はなく、口の端を上げた薄笑いを浮べた。
瞳が楽しそうに細められる。
そして一歩、少年の方に足を進めた。
「おまえ。私が怖くないのか？」
少年を面白そうに見ながら、男性が口を開いた。
「……怖い？どうして？」
少年は意味が判らず、問いを返す。
すると、次の瞬間。
男性は大笑いをした。

「おまえは変っているな。いいよ。そのままで…そのままがいい」

その3

炎の揺らめきの中で男性が笑っていた。
…やっぱり夢の中の出来事なのだろうか。
炎に包まれた男性の姿を見ながら少年は思った。
どう考えても現実の事とは思えない。
だが熱い。
ジッとしていると、全身から汗が噴出してくるのが判るほど熱い。
熱さだけが、唯一この光景が現実である事の証明だ。男性はもっと熱いだろう。
その中で平然とした顔をした男性がいるから、おかしいのだ。あまりにも平然としているから、自分の方がおかしいと思ってしまう。
「あなたは熱くはないのですか？」
少年は思ったら、無意識のうちに問いかけていた。
問うているうちに、熱さを我慢できないくらいに感じる。
額からポタリポタリと汗が滴り落ちる。
炎に包まれた男性が至近距離にいるが。これ以上近づけば少年は無事ではすまないだろう。
「僕は熱い。とても熱い」
訴えるように男性に言う。
「熱いのに、逃げないのか」
愉快そうに男性は言った。
男性に言われて少年は気がつく、逃げることは念頭になかった。
今でもない。
どうしてだか、この場から逃れようという気にならない。
そんな風に思えない自分自身も不思議で少年は、男性の言葉を繰り返した。

「逃げる？」
「ああ。そうだ。私から逃げないのかと聞いているのだ」
「どうして？」
「本当におかしな事を言う少年だ…このままでは、おまえは危ないのだよ。それが判らないのか。見たところ、どこか悪いところがある訳ではないようだが…私の持つ炎に包まれたら、おまえなど一瞬にして消えてしまうよ」
おどかすように、嘲るように男性は言う。
だが、そんな言葉を言い続ける男性の瞳は寂しそうで悲しそうだ。
やはりこの場所から離れてはいけないのだと少年は感じた。
男性が従えた、肩に留まるドラゴンがそう言っているように見える。
ドラゴンの二つの瞳は真っ赤な宝石のようで、口を開かずとも瞳だけで少年に語りかけている。
初めて見た伝説や物語で聞いたことのある、幻獣。
姿形から判断するのは難しいのに、何故かこのドラゴンは女性だと判った。
彼女の存在が少年の心を掴んで離さない。
今この場を立ち去ったら。
きっと、もう会えない。
それはイヤだった。
形のない、印象的な力が彼女から注がれ続ける。
自分の内にある器は彼女の力を受け、光で満ちあふれ輝いている。
この力を受けている間は命には別状はない。
少年は何故か、そう確信していた。
彼女は神の使いなのかも知れない。
だから…少年は自分の思いを男性へと訴えた。
「まだ見ていたい…この力に触れていたい」
「見ていたい？触れていたい」
「あなたの隣にいる、その美しいお姿を目に焼き付けていたいので

す。僕の中に満ちてくる、力の存在を…もっと感じたい」

その4

男性は少年の訴えを聞くと、おもむろに背後を振り返り、また少年に視線を戻した。
背後にいる存在を判らない訳ではないだろうし、どちらかと言えば付き従えているようにしか見えないのに、大げさな動作で確認する。
それは、まるで役を演じる役者じみていて、それを見ていた少年もわざとらしい動きだと感じる。
「ほう。なるほど…まだ小さいのに、魅入られたか」
わざわざ少年の言葉を確認したと、態度で示しているだと、この言葉でも判る。
男性は少年の問いには答えず、それどころかそんな言葉を聞いてもいないように、口の端を上げた
「キルシュ。お前の魅力はこんなに幼い子供にも通用するようだな」
「…キルシュ？…さくらんぼ…？」
「ええ。そうよ、私の赤い瞳が、さくらんぼに似ているらしいわ」
驚いたことにドラゴンが声を出した。
高貴な女性の持つ麗しい声色で、しゃべる。
よもやしゃべるとは思っていなかったので、少年はしばし驚いた顔をした後、かけられた言葉に返事をしていなかった事に気がつく。
「そう見えなくもないですが…」
熱さだけではなく顔を赤らめて、少年は呟いた。
似合ってはいないとしか受け止められない言葉で。
少年の言葉を聞き、男性が眉間にしわを寄せ不快感を露わにする。
「おまえは私の名付けに文句をつけるのか」
「その名前はあなたが付けたのですか」

「ああ。そうだ。名前が無ければ呼ぶのにも困ってしまうだろう」
「それは。そうですが…」
よりにもよって、こんな可愛らしい名前をつけるとは。
どちらかと言えば美しく麗しい名前こそ相応しいと思う。
どこまでも変な男だ。
相変わらず炎の中にたたずんだままの男性を見て、少年は思った。
男性も少年を見て楽しそうに笑う。
「それにしても、おまえは本当に面白いな…その体。まるで何モノからも自分を護ろうともしない、体質ともいえる特性。おまえ、術を学んだ事があるか」
「…術？」
「ああ。持って生まれた己の力以上の事を成すため、世界の根源から力を引っ張り出し自在に使う事さ」
「魔術の事ですか」
「そこまで大雑把なくくりにはしていない。そうだな。言わば、因果律を無視できるような…あってはならない物を呼び起こすような。そんな大きな術を使ったり、使うのに手を貸していないか？」
大きな魔術など見たこともない。そんな覚えの無い少年は、即答する。
「僕は魔術を学んだことはありません。叔母さんが修道士相手の宿屋をしているので、術の使える人と話す機会は幾らでもありますけれど…大きな術は見たことありません」
少年は素直に答えた後で、質問の意味がわからず首をかしげた。
「どうして。そんな事を聞くのですか？」
「おまえが面白い体質だと言っただろう。その体、本来ならば普通の人ですら持っている力を全く備えておらぬ。まるで何かの術の副作用で無くしたように。何かの術で使い切ってしまったように。まるっきり何もないのだよ。それでよく魔術の蔓延るこの街で平気な顔をして暮らしていられたな」
少年に関する事だったからか、今度は男性は少年の問いに答えた。

その４（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

定期的に更新できるかな～と、考えていたのですが。
年末で忙しくなってきたので、不定期更新になります。
ゆるゆるペースで、すみません。
でも、この話はこの感じで進みます。

その５（前書き）

その5

目の前の男性に呆れるように言われて、少年は自分自身のことを振り返った。

幼い頃、大火事で両親と妹を失ったが、あの火事で家族を失った人など大勢いた。

自分独りだけが抱えた不幸ではない。

去年街は流行り病で住人の三分の一を失うような災厄に見舞われたが、少年と親戚にその害は及ばなかった。

今のところ怪我をする事もなく、後遺症を残す病にも罹った事もない。健康で生活出来ている。

そう考えるとむしろ幸運な生活を送っているとも言える。男性の言う平気ではない状態とは何を指しているのだろうか。

やはり、幼い頃の火事の事だろうか。

燃え盛る炎の中で平気な顔で立っている…

こんな変な状況の中に居る男だが、案外外の世界よりも恵まれた生き方をしているのではないだろうか。

貴族達は平民に比べてずっと楽な生活をしていると聞いた事がある。

市場で大人たちが話していた話だが。

あの時にはそんな存在があるのかと、遠い異世界の話のように聞いていたが、この人がそうなのかも知れないと少年は思った。

ここは神殿の中。

普通ならば平民の入れない場所だ。

そう考えると奇妙な性格と性質を持った貴族が居てもおかしくない。

さっき男性は術の話をした。

その上、炎で包まれても平気な顔をしている。

それから、大きな力を持ったドラゴンを従えている事を考えると、

神殿に属する魔術の使える修道士…魔道士なのかも知れない。
今まで考えたどちらかであれば、合点がゆく。
平民では死んでしまうような事でも、この人やその家族は平気なのかも知れない。
少年は自分の思った事が正しいのか確かめたくて口を開く。
「子供の頃に火事で家族を失いましたけど…その事を言っているのですか？」
「火事…か…いや。そのような事ではない」
男性は少年の言葉を否定した後に、俯き考えこむ表情をした。
次の瞬間には顔を上げた。
「だが、そうか。私を恐れぬ理由はそれか。本来ならば、過去の忌まわしい記憶を恐れに変換する者が多いのだが。お前はそうではなかったのだな」
「…そうかも知れません」
話が逸れた事を感じつつ、少年は男性の言葉に答えた。
「なるほどな…」
言いながら男性は鮮やかな笑顔を浮かべた。
表情を浮べた男性を見て、少年は初めて彼の美しさに気がついた。
顔貌が整っているとは感じていたが、さっきまでは作り物のようで血など通っていないように思えた。
瞳の中の哀しい色ばかりが強調されて、他は目に入らなかった。
改めて見つめた彼の姿は神話の中に出てくる神々のようだった。
目を奪われる。
炎の中で微笑む姿は、まるで火の精霊のようにも思える。
男性は炎の中で微笑みながら続けた。
「それから…火事で家族を失った事とお前の体質とは無関係だな。家族を失った者など、この街には幾らでもいるだろう。病や諍いであれ、幾らでもある。私が言っていたのは、自分自身に関する事だよ」
少年が考えていた事は違ったようだ。

男性も恵まれている訳ではなさそうだ。
話をしているうちに、男性が人間らしくなってきたような気がした。
表情だけでなく、全身から漂わせていた冷酷さが今は消えている。
危うい感じも、哀しさも寂しさも無くなっている。
炎の中で立ったまま喋っているという、この状況がおかしいだけだ。
少年は宿に泊まる修道士の人と話すのと何ら変らないと思えてきた。
「思い当たる節はありません」
「そうか…」
少年がまっすぐ男性を見つめて返事をすると、男性は思慮深い瞳で考えるように返事をした。

その５（後書き）

長くお休みしていてスミマセン！！

続きは出来るだけ早く更新できるよう努めます。

その6

「僕に何が起こるとでも言うのですか？」
少年は教えをこうように尋ねた。
気持ちが昂揚し、ワクワクしてくる。
何でも知っている先生に質問すると、こんな気持ちになるのかも知れない。
少年は思った。
彼自身は学校には通っていないため、それは想像に近いものだった。
簡単な文字が読め、計算さえ出来れば仕事は出来る。
近所に住む子供達の中で学校に通う者はいない。
それを嫌だと思った事はないが、好奇心の強い少年にとって学校は、知識を深く知ることの出来る憧れの場所だった。
事実、この神殿を訪問した動機は、話に聞く神殿の内部が実際にどうなっているのか自分の目で見て知りたかったからだ。
長年そう思って、先日ひょんな事からその機会を得た。
馴染みの修道士が宿屋の名物の煮込み料理を他の修道士と一緒に食べたいから配達してくれと、注文してきたのだ。
いつもならば、叔母か叔父が行くところを、これ幸いと少年が配達することを強く願い、許してもらった。
料理を配達し、神殿を少し案内してもらったところで、非常事態が起こった。
立ち上る炎を見て、少年を案内した修道士は、その場所から一番近い出口を教えすぐに逃げるように指示すると現場に走り去っていった。
独り残された少年は、何となく立ち去りがたくて…修道士の彼の

指示した場所へ足を進めることなく、導かれる場所へと足を進めていった。
そして今ここにいる。
炎の化身のような男性は深く悩む表情をすると、何かを思いついたのか目を細めて微笑む。
「そうだな…例えば…」
男性が少年の疑問に答えようとした時、背後に居たドラゴンが二人の間を飛び、その存在感を示した。
少年の視線が再びドラゴンに釘付けになる。
男も少年の視線を追って、ドラゴンへ瞳を移した。
「そろそろ、こんな遊びは止めたらどうかしら？」
そう言ってドラゴンは大きく翼をはためかせて自己主張をすると、炎の中心に居る男性の肩にフワリと舞い降りた。
男を包んでいた炎が揺らめき、形を変える。
炎の中で男性がドラゴンの言った言葉を汲みかねて不思議そうに首を傾げた。
「体に火がつく頃でしょ？」
「……火…？…」
男性は不思議そうに言葉を繰り返すと、やっと理解できたように顔を明るくした。
「嗚呼。そうか。そうだな」
今初めて気がついたように男性は自分の周囲を見回す。
小さく顔を歪めて笑うと肩を竦め、ドラゴンに向って笑った。
「この身についたからといって、私が火傷するだけだから構わないが…」
「今の貴方に必要がある？」
「そうだな。ないな。こんな気晴らし、必要ないな」
「じゃあ。火を消して。遊びは終りよ」
「判ったよ。キルシュ」
男性はおざなりに返事をすると、鋭く尖った視線で自分の周囲を

取り巻く炎を見ると、薄く目を閉じる。小さく何かの言葉を呟いた。
次の瞬間。
今まで男性を取り巻いていた、大きな炎は忽然と消えた。

その7

「ようやく、正気に戻ったようね。アナトール」
肩に止まったドラゴンは涼しい声で言う。
淡々とした口調だったがで、どことなくホッとしたような色を滲ませていた。
一瞬にして、周囲を取り巻く空気が冷え、平温に戻っている。
ドラゴンの言葉を聞いて、男性は自嘲するような薄笑いを浮べた。
「気晴らしが…出来たからな」
そう言うと、ニヤリと笑い、少年を見つめた。
少年は男性と目が合い、驚いた。
さっきまで瞳の奥にあった寂しげな空気が全く無くなっていたからだ。
そして力強い何かの光が瞳には灯っている。
少年が呆然と男性を見つめ返すと、自信の満ちた笑みが返される。
暗さを微塵も感じさせない笑顔だった。
さっきまでの闇を背負ったような顔をしていた男性と同じ人だとはまるで思えない。
そっくりな顔をした別人…例えば双子の兄弟とでも言われた方が納得するくらいだ。
少年が男性の変化に驚いて、何も言えないでいると、ドラゴンが口を開いた。
「そうやって、自虐的になるのが貴方の悪い癖よ」
男性に向って苦言を呈した。
ドラゴンの言葉を聞いて、男性は肩をすくめると軽く言葉を返す。
「自虐的にでもならなければ、この破壊衝動は収まらないんだよ。自分ではどうにも抑えられないからこうなっているんだ。仕方ない

だろう」
　言い訳のように男性が言うと、ドラゴンは呆れた顔をした。
「いいえ。そうじゃないわ。暴走する理由は違うわよ。貴方がその理由から目を背けているだけ。判っているんでしょ」
「…判っているさ。だが、私にそれを真っ直ぐ見つめろというのか」
「そうね。見つめたからといって、原因がなくなる訳じゃない」
「ああ。時は戻らない…だから、これは呪いなんだ」
「自分でかけた呪いね」
「そうだな」
　男性はうなずくと、小さくため息をついて、謝罪するようにドラゴンに向って口を開いた。
「それは反省しているよ」
　ドラゴンと男性はまるで普通の会話であるかのように淡々と話をしている。
　今日の食事の支度で失敗をしたとか、そういう軽い口調だ。少年は聞きながら違和感を覚えた。
　少年には細かい内容までは判らないが、今買わされた会話は本当は深刻な内容なのではなかろうか。　男性がさっきまで炎に包まれていた…そして、この神殿の内部が燃えている…その事について話をしているようなのに。
　周囲に上がっていた炎は、いつの間にか小さくなっていた。
　場所によっては消えているところもある。
　誰かが消火したのだろう。
　それとも、さっき男性が自分を包んでいた炎を消した時に一緒に周囲の炎も消したのだろうか。
　そんなに強い魔力を、一人の人間が持つことなど可能なのだろうか。
　なによりも伝説でしかないと思っていたドラゴンが目の前に存在してる事だけでも、信じられない。
　信じるも信じないもなく、ただ存在しているだけだから。後は現

実を認めて受け止めるだけなのだが。それが少年にはできなかった。
目の前の現実に心が追いつけずにいる。
まるで幻影か幻惑の術にかかっていると言われた方が納得できる。
疑問や疑念が少年の中を埋め尽くしていく。
彼はだが自分の中で渦巻く思いに戸惑うばかりで、口で表現する事が出来なかった。
そんな少年のことには見向きもせず、ドラゴンと男性は会話を続けていた。
「あなたは呪いを解いたから…反省なんて、いいのよ」
「解けるか、どうかはこれから次第だな」
「そうね」
二名の会話はそこで切れ、二名は少年を見つめた。四つの瞳は力と確信に満ちている。
何かを自分に期待されている。
少年はその視線でそれを察した。
だが。現実に起こったことも消化できず、会話にもついていけなかった少年には二名の視線の意味が判らない。
「何を話しているのですか？」
少年は二名の視線に促されるように、浮かんだ疑問を口にした。
「これからの事だ」
男性が断言した。
「そう、これからの事よ」
ドラゴンも同じような言葉を続ける。
少年は更に混乱する。
「これからの事？」
二名に言われた言葉を疑問系にすると、ドラゴンが優しそうな微笑を浮かべ、包み込むような瞳で見つめた。
「ええ。自己紹介がまだだって話よ」
そんな話をしていたのだろうか。
少年にはそういう風には聞こえなかったが、ドラゴンと男性の間

には何か通じるものがあるようだ。
少年は気がつかなかったが、そういう符号のような言葉が会話の中に散りばめられていたのかも知れない。
少年の住む宿屋に泊まる修道士が交わす会話の中や、商人達が市場で話す言葉の中で、少年が幾ら注意深く聞いていても理解できない話の跳躍が度々あったことを思い出す。
一緒にいる時間が長くなれば判ることなのだろうか。自己紹介をするという事は、仲間になるという事だろうか。
何にしても、互いを知る為に、お互いの名前を知る事は必要だ。ドラゴンと男性の名前は会話の中で知ってしまったが、本来は互いが名乗り合い、自分が何者であるか表すのが順当な方法だ。
人が知り合う最初からはじめよう。
そう言っているのだけは判った。
少年は彼らの前に立ち、一歩近づく。
緊張して声が震えたが、大きな声で自分の名前を名乗った。
「僕の名前はザムゾン…ザムゾン・フリューゲルです」

その7（後書き）

何とか、木曜の間に更新。

明日はもう少し早い時間に更新したいです（切望）

その8

少年ザムゾンの名乗りを受け、男性も口を開いた。
「私はアナトール。『唄う鳥』のアナトールだ」
彼が名乗った役職を聞いて、ザムゾンは改めて驚いた。
この神殿は一般に『嘆く竜』と呼ばれるドラゴンと『唄う鳥』と呼ばれるドラゴンと契約した人を祭っている。
神の声を司る神官職などと一緒で、その名前の役職があり、現在も人がその職についているという事は知っていたが、それは形だけのことだと思っていた。
少なくともザムゾンや、その周囲にいる人たちはそう思って暮らしている。
伝説の中にも、その名称は残っている。
強大な力を持つ、人間の術者。
だが、まさか本当に伝説そのままに存在しているとは思わなかった。
ドラゴンという伝説の生き物を目の当たりにしていながら、その事には頭が回らなかった。
「…貴方が『唄う鳥』？この神殿の中心なのですか？」
ザムゾンが問うと、アナトールは肩に止まったドラゴンをチラリと見た。
「中心…まぁ、中心の補佐という感じだな」
アナトールの言葉を受け、ドラゴンが言葉を繋ぐ。高らかに宣言するように、威厳を込めて彼女は言った。
「そうよ。ここでの中心は私よ」
「彼女が『嘆く竜』キルシュ…この神殿の中心だ」
国家の中心人物と会っている。その事を自覚してザムゾンは今更

ながらに緊張しはじめた。
平民の彼からすると、アナトールもキルシュも皇帝や皇族、高位の貴族と目通りするのと同じく普通では考えられない接近だ。
庶民であれば、祭事に大通りに開かれた神殿から一般人へ向けた話をする時に姿を拝見するか、馬や馬車で移動する姿を一瞬見るくらいしか機会がない。
位の違う相手に対しての礼儀を宿屋で暮らすザムゾンは思い出した。
考えられないほど高い位の人に対してではないが、高位の者が宿泊した時、経験した。
身長差があるから、お互いが立っていてもアナトールがザムゾンを見下ろす形にはなっているが、許しもなく立って対面している事事態が失礼にあたる。
ザムゾンは慌ててひざまずいた。
「どうしたんだ。ザムゾン」
ザムゾンのいきなりの行動にアナトールは驚いた声を上げた。
アナトールの戸惑った声はザムゾンには届かず、彼は床に手をつき頭を下げた。
「大変申し訳ありません。いまさらではありますが、失礼な態度だと気がつきました。このような身分の高い方に対して、立ったまましゃべるなど…恐れ多いことを。お許しください」
拙い敬語だが、言わないよりもましだ。頭を床につけながらザムゾンは必死でしゃべった。
言葉を聞いて、アナトールは困惑に顔を曇らせる。
「ああ。なるほど。そう言えば、そうだな。身なりで気がつくべきだった。どういう理由でここにいるのは判らないが…お前とは身分がかなり違っていたか」
独り言のように小さく呟く。
「だが…困ったな。こういうのは想定外だ」
土下座をしたままのザムゾンを呆然と見つめていたが、良策は思

いつかなかったようだ。
大きなため息をつき、肩に留まるキルシュを助けを求めるように見つけた。
「どうすればいいと思う？キルシュ」
「ふふっ。アナトールって箱入り息子だものね」
アナトールの困った顔を見ながら、キルシュは楽しそうに笑った。
「箱入りとか言うな。こんな場面に遭遇したことがないのだ。助けてくれ」
「いいわよ。こういう時は許してお願いすればいいのよ。別に貴族だろうが平民だろうが関係ないわ。高位のものは下位のものに対してどう接するかしら。政治の場面を思い出して。考えれば簡単な事よ」
キルシュに言われ、アナトールの顔がすぐに明るくなる。
嬉しそうにザムゾンに声をかけた。
「ああ。そうか。ザムゾン顔を上げてくれ」

その８（後書き）

昨日よりは少し早く更新できました。
よかった。
来週も同じように、２日ほど更新できたらと思っています。
この分だと、木・金曜日が有力でしょうか。
試行錯誤を続けてみますｗ

その9

アナトールは跪き頭を下げたザムゾンに訴えるように言った。
「さっきのままでいて欲しい。そんな風にかしこまらないで欲しいのだ」
アナトールの困惑は充分に伝わっていたが、ザムゾンも混乱していた。そもそもこの場所に入る事自体、恐れ多いことだったのをすっかり失念していた事を改めて思い出したからだ。
何かあったら、親代わりで面倒を見てくれている叔母さん夫婦に迷惑がかかる。ただ何のお咎めもなく、この場を立ち去ることが一番無難で波風が立たない。ザムゾンは少ない知識の中でそう判断した。
アナトールやキルシュに対する興味や関心はあるし、もっと話しをしてみたいという気持ちもある。彼等がザムゾンを害する気はなく、もっと話をしたいと思ってくれている事も判っていた。
だが、それとは別次元で彼等とは同じ場所で存在する事が許されていない、会う資格が無いのも確かなことだ。
この国ではそれほど身分に対して厳しい考えが根付いていた。
「そういう訳にはいきません。僕とあなたとは違い過ぎます」
ザムゾンも懇願するようにアナトールに返事をする。もっと生家の家柄が良いか、平民でも素晴らしく知恵があり修道院に入るくらい優秀ならば、こんな事を言う必要はなかった。
無理なことだが、ザムゾンはそう考えてしまった。単なる興味だけで、軽はずみな行動を起こした結果だと考えた。多分次の機会はないだろう。後悔と名残惜しさが胸に過ぎる。
…やっと、自分の求めているものの欠片に出会えたと思ったのに。
自分を形作る重要な何か、それを彼等から引き出し、得ることが

出来たかも知れないのに。
　顔を上げられず、下を向いたままのザムゾンを見てアナトールは肩を落とした。
「年長であるし、責任ある立場でもある。そういう事を考えると…それなりの責任と威厳は必要だな。確かに。お前の言う通りだ。身分が違うこと以上に、お前のその態度は正しいと言わなければならない。だが…私はお前にそんな態度で接して欲しくはないのだ」
　強い言葉にザムゾンの心が揺れた。
　アナトールは言葉を続ける。
「私は自分の名も役目も告げず、ただひとりの人間としてお前と出会ったのだから。ただひとりの人間。アナトールとして、お前と話をしたい。そう思うのは贅沢だろうか」
　アナトールの『ひとり』という言葉が『独り』と聞こえ、ザムゾンはドキリとする。
まるで彼が孤独であるように思え、ザムゾンは心に今まで感じたことのない軋みを感じた。
　顔を上げると真剣な瞳をしたアナトールと目が合う。
　まるで迷子のような心細そうな目。哀しい色がたゆたっている。
…どうしてそんな瞳を？
…そんな寂しそうな目。
「アナトール。あなたは寂しいのですか？」
　思った言葉は無意識のうちに口から出ていた。
言葉を聞いてアナトールは哀しげな目を驚きで瞠る。
「どうして、そう思う？」
「そんな風に見えたんです。炎の中のあなたの目も寂しそうで哀しそうだった。そして今も。とてもとても寂しそう」
ザムゾンが言葉を重ねるとアナトールの顔から哀しさと寂しさが徐々に消えていく。
表情は変らなかったが、その顔はどこかしら嬉しそうに見えた。
「そうか。ザムゾンの目には、そう映ったのか」

「まぁ、同情されているわよ。アナトール」
しみじみと言うと、今まで黙っていたキルシュがおかしそうに笑いながら言った。
「私に同情する人間がいるとは思ってもみなかった」
「スミマセン…失礼な事を言いました」
そう言われて、ザムゾンはまた失言したことに気がついた。身分違いどころじゃない。顔を真っ赤にすると、謝罪する。
「いいや。失礼でも何でもないさ。ただ珍しいと驚いただけだ。そんな風に見てくれる人がいるとはな」
アナトールはそういうと寂しそうで哀しそうな気配を一掃し、嬉しそうに笑いキッパリと言った。
「決めたぞ、キルシュ。私はザムゾンの友人になる」

その9（後書き）

次の更新は明日の予定です。

その１０

「ゆゆゆゆ・・・友人？！」
いきなりの思っても見なかった宣言にザムゾンは驚いた。頭の中が真っ白になる。
「そんな・・・僕は・・・」
何も考えられなかったが、とんでもないことが起こったことだけは判った。
さっきザムゾンはこの場所へ二度と足を踏み入れることもできなければ、アナトールやキルシュとも二度と会えないことを覚悟した。その決断を一言で１８０度変えてしまった。
アナトール自身は本気でそう思っているのだろうか。
もしそうだとして。そんな事が本当に許されるのだろうか。
ザムゾンの胸の中を様々な不安が過ぎる。
呆然とした表情のザムゾンを見て、アナトールが眉にしわを寄せ怪訝そうな顔をした。戸惑うように口を開いた。
「もしかして迷惑だったのだろうか？」
「迷惑だなんて…そんな事ありません」
ザムゾンはアナトールの言葉を聞いて即座に否定する。
「なら、いいだろう。私には同士はいても友人はいないのだ。いや・・・厳密にはいた。何人も。思い返せばかなりの数の友と語らい充実した時間を過ごした事もあったな」
「全て遠い過去の事だが…」
「遠い過去？この生活をどれくらい続けているのですか」
「ああ。そうだな。かれこれ２０年くらいこういう生活をしている」
…一体、幾つなんだろう。
…人でなくなる位に永く生きてきたのだろうか。

ザムゾンの脳裏に出会った時のアナトールの姿が浮かぶ。炎に包まれた神の化身のような姿。
疑問をザムゾンは口にしなかったが、アナトールにはわかったようだ。小さく笑うと口を開く。
「こんななりだが私は今年で五十二歳だ…いや三かな。四か…どうだったよな。キルシュ」
「最初の回答で合っているわよ。もう自分の歳くらい憶えていて欲しいわね。私は自分の歳を忘れたこともないのに」
「では、キルシュは幾つなんだ」
呆れたようにキルシュが言うと、アナトールはいたずらを仕掛ける子供のような表情で問いかける。
「判ってるでしょ。貴方には以前教えたのだから。淑女に年齢を問うなんて…必要ならば教えるけれど」
「いえ。そんな必要はありません」
「ほぉら。礼儀正しい。精神的にはアナトールよりもザムゾンの方が大人ね」
「そんな事ないです」
ほめられて嬉しくなる。ザムゾンが頬を赤らめて緩める。
そして質問の答えが途中だったことを思い出した。
「それで…どうして、貴方はそんな姿なのですか」
「術の影響で、みかけの年齢が二十台で止まっているんだ。大きな術を完成させたのはいいが、代償は見える形にも表れたという訳だ。まぁ。歳を取る術を使えば歳相応に見えるようにも出来るが…わざわざ術を使って歳を取るなど意味があるとも思えないから、このままの姿でいる。私の存在の異質さは、見た目を普通にしただけで隠しおおせるものでもないからな。普通の術者など遠方でも私の存在を察知することが出来るから、隠れることさえも出来ない。まぁ…私を守る必要はないのだから。隠れる必要など何もないのだがな」
確かに歳よりも年齢は高いが、ザムゾンはアナトールに友人がいないという言葉から、人の寿命よりも永く生きていたのだと勝手に

考えていた。
その位の年齢の人なら、ザムゾンの住む町にも沢山いる。
度重なる流行病を潜り抜けて現役で働いている人も多い。
なのに、アナトールの友人は存在しない。それはどういうことなのだろう。
「でも…だったら、ご友人達は…」
ザムゾンが尋ねると、アナトールはここではない何処か遠くを見つめるような瞳をした。
「死んだよ。私をおいて・・・術の完成を見ずに、みんな私をおいて先に逝ってしまった」
「術の完成？」
「ああ。術を完成して望みを叶えることが、私達の夢だった。みんなの望みを託され、ひとり残された私は、ひとり術を完成させた。そして今はその夢を叶える最後の準備にかかっている。そのためだけに、私は生きてきている」
「友達がみんないなくなって…だから、寂しいのですか」
「そうかも知れないね」
「どんな術なのですか」
「この国の平和を掴みとれる強大な術だよ。わずか数十年でもいいから、停戦できればと思っている。大きな戦のない国にしたいのだ。それがみなから託された仕事だ。私はそれをやり遂げねばならない」
まるで遺言のような言葉。
望みが叶ったら、もう思い残すことはないと言っているようにも聞こえる。
まるで過去に囚われているようだとザムゾンは思った。
未来への希望や期待や喜びを感じない。それが哀しさの本質に思える。
彼は大きな力と役目を追い、死んでいった友人との望みを叶えるためだけに生きている。
ザムゾンの胸に言いようもない強い衝動が駆け抜けた。

「アナトール」
「なんだ。ザムゾン」
敬称もつけずに名前を呼ぶと、アナトールは嬉しそうに頬を緩めた。
「僕をあなたの友達にして下さい」
ザムゾンの言葉を聞いて、アナトールの顔が輝く。嬉しそうだ。
「いいのか？本当に」
アナトールの笑顔を見て、ザムゾンも嬉しくなってくる。
自分の気持ちを確認した。この神々しくも寂しい彼の力になりたい。
「僕がアナトールの友達になりたいんです」
「ありがとう」
嬉しそうな顔はアナトールを見た目よりも更に若く見える。
自分の小さな力でも彼を喜ばせる力がある。
それを実感てザムゾンの小さな胸に大きく温かい喜びが湧き上がってきた。

その１０（後書き）

ここまで読んで頂きましてありがとうございます。

もう少し早い更新を目指していましたが、やっぱり夜になってしまいました。

がっかり。

でも夜と書くと夜を越えそうなので、一応夕方を目指して頑張ります。

（もしかしたら昼って予定にすると夕方になるのかな？うぅむ。自分の事だから管理が超難しい＾＾；）

次回の更新は、水・木・金曜日の中で２回の予定です。

（ここのところの時間の使い方だと木曜日＆金曜日の可能性が濃厚）

がんばりますｗ

その１１

遠くから声がした。ザムゾンが振り返ると二人の人物がコチラに向かって声をあげている。
二人は遠目からでも肌の露出が極端に少なく、濃い色合いの布に文様が描かれた服を着ていた。
馴染みのある意匠の図形の組み合わせ。
神殿の外にも内部にも入り口にも、神殿にかかわるあらゆる場所で目にするモチーフ。
神殿にまつわる物が随所に散らばる服装は、ひとめ見ただけで神殿の仕事をしているという事が判る。長い上着の下は真っ直ぐなズボンをはいているから男性だという事が判る。
女性であれば、短めの上着にすそが広がるスカートをはいているからだ。
話によると儀式の間は、普段目にする衣装とは全く違った形や色らしいのだが、平民のザムゾンには関わりのない話だだった。
その彼等がこちらに向って声を上げている。
ザムゾンは耳をすました。
「アナトール」
「霜刃さま」
さっきまではひとつの音の固まりにしか聞こえなく、なんと言っているのか聞き取れなかったのだが、視線を向けることによって、二つの単語が判別できた。
ひとつは目の前の男の名前だと判るが、もうひとつは判らない。
「・・・・・・霜刃さま？」
疑問はつぶやきになって、無意識に口から出ていた。
隣でアナトールがフッと笑った気配がした。

「それは私の呼び名だ」
「アナトールの呼び名？」
「ああ。そうだ。本来は私の使う術の名前なのだがね」
ザムゾンの質問にアナトールは嬉しそうに答えた。
「術の名前」
「そうだ。神殿内では『霜刃』と呼ばれる事が多いな…前の調停者がそう呼ぶものだから、すっかり定着してしまった」
ちょっと困った声でアナトールが言う。
「他の人と呼び名が重なったりしないのですか？」
疑問を口にすると、アナトールは哀しそうな声で答えた。
「そんな簡単な術じゃないんだ。多分この世で『霜刃』使い手は私くらいだろう。炎の柱で全てを切り裂く術だ。人も建物も関係なく、全てを焼き尽くす」
終りの方は悔恨の色がうかがえる。
アナトールの説明にさっきまで彼が起こしていた現象が重なる。
あれは間違って術が発動したという事なのだろうか。
「では…さっきのは…」
「同じではないが、関係なくはないな。術の残滓のようなものだ。暖炉の火を消してしまわないように、炭火を灰に埋めたりするだろう。いつでも火をつかえるように」
「埋み火ですか？」
「そうそれのようなものだ」
「では、さっきの事は大した事ではなかったと」
「そうだ。何かのきっかけで炎は燃え盛る。術を発動してしまったら、神殿は木っ端微塵だから大した事ではないと言えなくはない」
全てを焼き尽くす劫火の中にいるように思えていたが、今の説明では大した事のないように聴こえる。
ザムゾンが見たのが初めてだからなのかも知れないが、どうにも納得いかない。
大きな戦という言葉も、街で暮らしていたら、戦に関わる情報は

入ってくるが、戦は遠くで行われているので実感が沸かない。
風の街は皇帝が直接統治する四つある街のひとつだが、主に皇帝の居住となっているのは王都フレアであり、この街とは距離がある。
高位の貴族はそれぞれ統治する領地を持ち暮らしているし、特別な時以外は皇族も貴族達もこの街に逗留することは少ない。
この地に関係するそう位の高くない貴族の邸宅はあるが、戦と大きな関わりがあるとはいえなかった。
そんな中で暮らしていると、戦の影響は大規模であればあるほど、街の外から物が入ってこないという事だけだ。
直接困るのは食料に関わることだけで、それは天候不順による不作や、疫病によって農村がダメージを受けた時とあまり変らない。
ザムゾンは改めて自分が暮らしているこの場所が安全な所だったのだと気がついた。

その１１（後書き）

何とか木曜日に更新・・・
なかなか生活リズムが戻りません（＾＾；）
次の更新は明日です～

頑張ります。

その１２

「だが、この中に居る者にとっては、そうは言えないだろうな」
自嘲的な歪んだ笑いを浮かべ、アナトールは続ける。
「敵が奇襲を行ったというならまだしも。同胞の所業なのだから。いい迷惑だ」
ため息をつくと、すっくと立ち上がった。
彼が立ち上がっていたのを見て、ザムゾンは自分が床に座り込んでいたことに気がついた。
アナトールにつられるようにザムゾンも立ち上がる。
すると、アナトールの肩にまるで置物のように留まっていたキルシュが翼を広げ羽ばたかせる。宙に浮き上がった。
壮麗で軽やかな飛翔を目撃し、ザムゾンはその姿にひきつけられる。
キルシュは人影の近くまで飛んで行くと、まるで歓迎するかのように頭上を舞い、ゆっくりと旋回してアナトールの元に戻って来きた。
鮮やかな力が遠くに離れていく寂しさと、近づいてくる喜び。
話しに聞く思い人に対する感情というものは、これではないだろうか。
そうザムゾンは思った。瞳を輝かせキルシュを見つめるザムゾンを見て、アナトールは少し複雑な表情をした。
近くまで戻ってくると、キルシュはザムゾンをチラリと見た。
視線が合ったと思ったら、真っ直ぐ空中からザムゾンに向って降りていた。
音もなくザムゾンの肩に留まった。
「うわっ」
何の断りもなく留まったキルシュを見て、ザムゾン驚き、一歩後

さずる。
急な動きだったが、肩に留まったキルシュは平然な顔をして、揺れることもなく、ザムゾンの肩に留まったままだ。
「まぁ、失礼ね。私がキライなのかしら」
「そ…そんな事ないです」
すねたような口ぶりでキルシュが言うと、ザムゾンは激しく顔を横に振った。
アナトールは呆れた顔でキルシュを見る。
キルシュの言葉は判っていてやっている事は明白で、わざとらしいにも程があるのだが、ザムゾンはそれに気付かない。
「ごめんなさい。僕、驚いてしまって」
ザムゾンは顔を真っ赤にして弁解すると、キルシュは小さく笑った。
その笑みはザムゾンの心を暖かく照らす。
鱗に覆われ鋭い牙を持つ、たいかにもドラゴン然とした、伝説通りの姿なのだが親しみを抱く笑顔だった。
いかつい鱗や硬い顔の表面に関わらず、表情がクルクルと変るからなのかも知れない。
「重いかしら？」
「そんな事ないです」
「そう。ありがとう」
赤い目を輝かせキルシュがにこやかに笑う。
そして、表情を硬くするとアナトールに目を向ける。
「あんな術を使えるようにするから、こんな風になるのよ。今、貴方の焼いた神殿を粒さに見てきたわ。アナトール。あれはやはり人には扱えない類のものなのよ」
「人間には…な」
アナトールはキルシュの言葉に軽く返した。
キルシュは更に険しい顔をして口を開く。
「あなたも人間よ」

「そうだな。でも、術は完成した。もう遅い」
「そうね。今さらだわね。終わったことを、何回もいうなんて。私も年を取った証拠だわ」
アナトールから目をそらすと、ザムゾンに顔を向けた。
キルシュの切ない瞳を見て、ザムゾンはたまらない気分になる。
彼女といい、アナトールといい、自分よりもずっとずっと長生きしているはずなのに。放っておけない。
二名の力になりたい気持ちが沸いてくる。
他の人では感じることのない感情にザムゾンは自分自身も驚きながら口を開いた。
「年寄りだなんて・・・そんなことありません。あなたは素敵です」
真剣に言われ、キルシュの目が丸くなる。
驚いているのが近くに居るせいか、まざまざと伝わってくる。
「・・・だそうだよ。良かったな、こんな近くに信奉者がいて」
ザムゾンの言葉をアナトールが苦笑いをしながら茶化す。
アナトールの声でキルシュは表情を元に戻すと、小さく笑った。
「子供に慕われても仕方ないわね」
「子供じゃありません」
「これ以上ないくらい、子供だが」
「子供よね」
二名に子ども扱いされて、腹が立ってくる。
だけど、二名とも楽しそうだ。
重い空気が軽くなったのは嬉しいが。内容が気に入らない。
ザムゾンは喜んでいいのか、怒っていいのか判らなくなりながら大きな声で言い切った。
「今はそうですけど。すぐに大人になります」
ザムゾンの声の後。
しばし沈黙が流れた。
言葉が続かなかったようだ。
最初に口を開いたのはキルシュだった。

「私を護る騎士になってくれるのかしら？」
「頑張ります」
ザムゾンの言葉を聞いて、アナトールが続ける。
「それは頼もしい。では私も一緒に護ってもらおう」
にっこりと笑うアナトールの前で、ザムゾンは驚いた顔をする。
その顔を見て、キルシュとアナトールは声を上げ、楽しそうに笑いはじめた。

その１２（後書き）

ぎりぎり更新。
次の更新はいつものように木曜日の予定です。

その13

「……アナトールを？」
呆然とした表情でザムゾンが答えると、アナトールはさっきまで大笑いしていた表情を引っ込め、澄ました笑顔を作った。子供のザムゾンんから見ても明らかに作ったと判る笑い顔。
それは同年代の友達がいたずらを仕掛けたり、からかっている時の表情と重なる。
大人気ないこと、この上ない。
でもそれは嫌ではなかった。
むしろ心の距離が近くなってきた気がする。
「ああ。それくらい出来るだろう。私よりもキルシュの方が強いからな。キルシュを護れるなら、私なんてそれから比べると僅かな力しか必要ないさ」
アナトールは言い切ると、軽く片目を瞑った。
コミカルな表情をすると、近所で商売をしている青年達と同じ。親しくなれば、そんなものか。そう腑に落ちた。彼は自分と全く違う訳ではないと痛感する。置かれた立場は違うが、それだけだ。目の前に居れば話も出来るし、理解し合える。友情も育めるような気がした。
「そう説明されれば、そうかも知れません」
「そうだろう。それくらい強い大人になってくれるか。ザムゾン」
「はい。アナトール」
ザムゾンが答えると、アナトールは本当に嬉しそうな笑顔を浮かべる。
…強くて寂しいこの人をこの人達を守りたい。
ザムゾンは心の底から思った。
「霜刃さま？」

「アナトール」
ほんの近く…後ろで声がする。
怪訝そうな声の響きに振り向くと、さっき遠くから呼んでいたと思われる男達、近くにいた。
あの後、ザムゾン達が話している間に、到着したのだろう。
二人は少し距離置いたまま近づかず、神妙な顔をしながら視線を巡らせる。
ひとりは見るからに厳しそうな顔をした身分の高い壮年の男性で、ひとりは二十台前半にしか見えない若い青年だった。
青年は何かを口の中で呟き、両手の指で何かを宙に描いた。
周辺の空気が緊張を孕む。
何かの術を使ったという事だけはザムゾンには判った。何だかは判らないが。
二人とも難しい顔をした後に顔を見合わせ、沈黙をする。
しばし無言の時間が流れた後。若い方が口を開いた。
「どうして…こんな事が起こったのですか？」
「ああ。彼のお陰でね…」
曖昧な疑問にアナトールは楽しそうに笑って答えた。急にザムゾンの存在を告げられ、ザムゾンも驚いたが、二人の男性はもっと驚いたようだ。
「彼の…？」
「この少年が？」
青年は呆然とした顔で不思議そうにザムゾンを見つめ、壮年の男は不信感を隠すことなくザムゾンの中を探るような視線で見つめた。
足の先から頭のてっぺんまで。体の内部の隅から隅まで。全てを見られ撫でられるような感覚に、不快感が走る。
気持ち悪さから一歩男から距離を取ると、肩に乗っていたキルシュが肩に爪を食い込ませる。
「…痛っ」
痛みにザムゾンが顔をしかめる。その瞬間、今まで感じていた不

快感が無くなった。
「そんな風に探る必要はないわ。大神官。その術を使うには、ちゃんと本人の了解を取って頂戴。それから私とアナトールに挨拶がまだよね。年長者がそれでいいのかしら」
キルシュが尊大な声で言うと、壮年の男性は深々と頭を垂れた。
「これは失礼しました。『嘆く竜』様」

その１３（後書き）

更新、遅くなってスミマセン！！！！
次は明日です～頑張りますｗ

その１４

大神官と呼ばれた男と共に、青年も慌てて深々と丁寧なお辞儀をする。
キルシュに向ってしているものだが、ザムゾンの肩に乗っている以上、ザムゾンに向ってしているのも同じ事だ。
立派な恰好をした大人二人に頭を垂れられ、ザムゾンははじめての経験に落ち着かなくなる。どうすればいいのか判らない。
助けを求めるようにアナトールを見ると、アナトールはザムゾンの視線を受け目配せをする。
小さく微笑み、了解の意を示した。
「まぁまぁ…キルシュ。そんな風に苛めることないじゃないか」
「あら。苛めてはないわよ」
アナトールがなだめるように言うと、キルシュは澄ました顔で答えた。
「そうは思えないのだが…まぁ良い」
小さくため息をついてアナトールは話を変えた。アナトールは柔らかい笑顔を浮かべ、寛大な身分の　高い人物の表情で話しかける。
微かな緊張をザムゾンは感じた。男達が声をかける前までの柔らかい雰囲気は消失して、表面だけは穏やかだが緊張が漂っている。
「では。二人とも、私の命だ。面を上げよ。お前達の意見が聞きたい」
アナトールの言葉に二人は頭を上げた。
大神官は何か含んだ顔をしながら口を開いた。
「どのような意見でしょうか？」
「この少年の事だ。どう見える？さっき術を使って探ったであろう」
「そうですな…何の力も感じませんでした。私には普通の少年としか言いようがありませんな。この少年が本当にアナトール殿を静め

たのですか？」
大神官は術を使った事を隠そうともせず、単単と答えた。。
彼の言葉を聞いて、ザムゾンは術で内部を探られたから、変な感覚に襲われたのだと悟った。
大神官の疑問にアナトールは答える。
「だがそうなんだ。もう判っているだろう。この場所を調査したのだから。それに私とこうして、まともに話ができている」
「確かにそうですな」
大神官は不承不承納といった様子でうなづいた。
「今日は調停者の命、繋がったようだ。私も安心したよ。この少年…ザムゾンに感謝してくれ」
自嘲的な笑いをしながら、アナトールは青年に言った。調停者と呼ばれた青年は慌てて口を開く。
「霜刃さま！そんな言い方止めて下さい」
「ん？その覚悟で来たのだろう？杞憂に終って良かったな」
「そんな滅相もありません」
「大切な調停者を何人も失うことなど、国家の損失だからな。私は本当に良かったと思ってますぞ。それに大事な一人息子だ。親としての立場からも感謝せねばな。少年。ありがとう」
やや不遜な態度で感謝を示されたが、ザムゾンにとってはそっちの方が慣れている。
「いえ…僕もどうしてだか判らないのですが…力になれて良かったです」
ザムゾンが素直な言葉を示すと、大神官は迫力のある笑顔を浮かべた。だが本当に嬉しそうだ。その顔を見ている限り悪い人では無さそうだ。
「父上。そんな言葉と態度…霜刃さまの批判など、とんでもありません」
「いいや。父より先に息子が亡くなる事を良しとするなど…私はお前をそんな親不孝者に育てた覚えはない」

「口が過ぎます。父上。父上こそ国内外で名を轟かせるほどの術者なのに、そのもの言いよう。おかしいですよ」
「おかしいのは、この世界全体だろう。私ではない。三十年ほど前から隣国がおかしくなっておったのは確かだが、この国までこぞって一緒におかしくなる必要はないだろう。アナトール殿そうは思わないだろうか」
「父上！」
「唄う鳥と嘆く竜の御前であるぞ、その呼び方は止めなさい」
「確かに…この場にそぐわぬ言葉使い、大変申し訳ありませんでした」
調停者の青年はキルシュとアナトールを見て、目礼しつつ謝罪の言葉を述べた。
この場所に相応しくない言葉だと気がついたようだ。大神官自身は公私混同した物言いをしたままで、自分の事は棚上げしているのだが、調停者の彼はそれではいけないと思っているのだろう。
彼は謝罪した後に、悔しそうな顔で大神官を睨みつけた。
「いいんだ。君の父の言うことはもっともだ。本来ならば、こんな術に頼らずとも平和を勝ち取れれば　苦労はないのだが…お前達には苦労をかける」
「そんな風におっしゃられると、わが身の力の無さを深く痛感しますな。この現状は先達であるべき我々やその祖先様達の不甲斐なかった故。それ故のアナトール殿の決意と行動ですからな」
「そうですよ」
大神官が殊勝な顔をすると、調停者はやっと元気な声で反論を始めた。
「私は霜刃さま無くして、この国の平和は掴めない。そう確信しています。そのための犠牲など…これまで戦で失った同士たちを思えば、何でもありません」
「そうか。ありがとう。これからも、宜しく頼む。頼りにしているぞ」

アナトールは悠然と笑って調停者に言葉をかける。その瞳は哀しみをまとっていた。
ザムゾンにはそれが見て取れた。
だが、声をかけられた調停者の青年は違ったようだ。
はにかむような笑顔で嬉しそうに返事をした。
「はい。貴方のお力にかれるよう頑張ります」
調停者の返事を聞いてアナトールの目が闇の色をまとった。
…いつか、術の暴走でこの方を失う事を恐れている。だがそれを恐れていると強く表してはいけない。
こうやって、彼の哀しみの日々は続くのだろう。
そうザムゾンは感じた。

その１４（後書き）

今日もなんとか予定通りの金曜日に更新できました。
ぎりとは言え、予定通りに出来た自分を自分で褒めておきます。
次は来週の木・金曜日予定です～
また来週ｗ

その15

アナトールの哀しみを感じる一方で、彼はザムゾンの思ったような全く味方のいない孤独ではない事を知る。ホッと胸を撫で下ろした。

次の瞬間には、そんな自分自身に驚く。

ほんの少しのやり取りしかしていないのに、アナトールに対して心の距離を感じなくなっている。まるで身内のように…否、身内の誰よりも近くに感じている。

これがアナトールの言う他の人との違いというものなのだろうか。ザムゾンにはわからない。でも何か自分とアナトールの間に他の人にはない共通点があると思ってしまうのも確かだった。

ザムゾンがアナトールを見ると、彼の視線と合った。固く暗い瞳の色がすぐに柔らかく変化する。自然な微笑みが顔いっぱいに広がった。

まるでザムゾンが思っている事がアナトールに伝わり、慰撫してあげられたようだ。

アナトールは、青年に話しかた。

「そなたには彼はどう見える？面白くはないか？」

「面白い？」

青年は不思議そうに答えた。彼も父親で大神官の男性と同じような意見のようだ。ザムゾンに対して興味もなければ関心もない。

露骨に違うと主張しないのだけが違う。

アナトールを信奉しているであろう彼は、彼の真意を知ろうと思っているのかどう表すべきかうかがうような顔でアナトールの顔を見る。

そんな反応をアナトールは想定内だと思っているのか、機嫌を悪

くするわけでも落胆するわけでもなく、青年の反応を楽しむような顔をして続けた。
「ああ。力の気配を全く感じないだろう」
「えっ…あぁ。確かに。魔力が無いのは、見てすぐ判りますが…それは何の危険もないという事で…格別、面白いとは」
アナトールが言うと青年はその意見には理解を示したが、彼の感想にはどうにも同意できない様子だった。
「普通はどうだ？」
アナトールの問いに、青年は顔を輝かせる。
青年はようやくアナトールの真意を察したような顔をした。
「なるほど。そうですね。ここまで魔力がないという事は普通ではない。神殿の力の庇護があるから、この街での生活では支障はないでしょうが。街から一歩外に出るとなると大変な思いをしそうですね。そういう意味では確かに面白いかも知れません…」
青年は普通ではない事は判ったが、どうにも納得がいかないようだった。
青年にとって魔力がないという事は興味の対象にはならないのだろう。
その答えを聞いて驚いたのはザムゾンだ。
改めて自分が他の人と違うという事を知る。
今は街の外に出る事は考えていなかったが、思いもよらない自分の体質を伝えられて、困惑する。街に居れば大丈夫だということだから、すぐに困ったことになる訳ではないのだろうが、知らないと何かと不便なことが起こるかも知れない。
アナトールが小さくため息をついて口を開いた。青年に向けて話かける。
「まぁ、判らないのなら。無理に判った振りをしなくてもいいさ。それより、何か私に用があったのだろう？」
「そうでした。火急の用事です。リンドナー騎士団長殿が折り入って話しがあるとか」

「いよいよ…か」
青年の言葉にアナトールが答える。
それに次いで大神官が重々しく答えた。
「そうだ。その時が来たようだ」
大神官の言葉にアナトールは大きく頷いた。遠い場所を見つめるような瞳をする。
ザムゾンの肩に乗っていたキルシュは翼を広げて宙を舞い上がった。
「こんな場所で力の浪費をしている状態ではないという事だったのだな」
アナトールが呟くとキルシュが音も無く彼の肩に留まり、彼の言葉に呼応するように言った。
「遊びの時間は終りのようね」

その１５（後書き）

次の更新は明日です。よろしくお願いしますｗ

その16

空気が変った。
周囲のみんなから張り詰めた緊張が漂う。
何のことか語られなかったが、力を使うようなことをしに行く事だけはザムゾンには判った。
それは即ち、戦場へと帰って行くという事に他ならない。
…アナトールを苦しめる元凶となる場所へ、また彼は帰っていく。
「アナトール！」
表現出来ない思いが胸から溢れ、ザムゾンは声を上げた。
「こら。少年。『唄う鳥』殿に向って名前を呼び捨てにするとは、何と失礼なことをするのだ」
ザムゾンの言葉を聞きつけ大神官が威圧するように言い放つ。
凄まじい迫力にザムゾンは後ずさる。頭の中が真っ白になった。
それを見てアナトールは宥めるように口を挟んだ。
「いいんだ。大神官殿。彼は悪くない。私がそう呼ぶように願ったのだ」
大神官は訳が判らないという表情をした。
「何故そんな事を…それでは他の者に示しがつきませぬ」
「いいだろう。私の奇行は今に始まったことではないし。こんな例外くらい可愛いものだろう。彼だけが例外だ。これからそう覚えておいてくれないか」
「アナトール殿にそこまで言われますと…許さない訳にはいきませんな」
アナトールに押し切られ、大神官は黙った。
「それよりどうした？ザムゾン」

「あの…その…」
アナトールに優しく尋ねられたが、ザムゾンは言葉を紡ぐことが出来なかった。元より、形になっていない思いだけで彼の名を呼んだのだ。
辛い思いをする事になるとしても、彼はこのために生きてきた。行くなと言えないことも充分判っている。頑張って下さいというには重すぎる仕事だ。どうしてあげる事が彼の心の支えになれるのだろう。ザムゾンは悩み自分の無力さを強く感じた。せめて自分がこの場所で待っているという事だけでも伝えられたら…
無言のザムゾンの答えを待っていたが、大神官や調停者の視線に急かされ、アナトールは諦めたような顔をした。
「すまないな。急に仕事の予定が入った。しばらく忙しくなる。私もすぐに神殿を出ることになるし…今日のところは帰ってくれないか。相応の謝礼は持たせよう」
…離れていく。行ってしまう。何か伝えなければ…
アナトールの言葉に別れの気配を感じてザムゾンは口を開いた。
「謝礼なんて…そんなものはいいんです。それより…」
「それより？」
「また僕と話をしてください。キルシュも一緒に。僕達は友達なのでしょう」
「そうだ。そうだな」
ザムゾンの言葉をきいてアナトールの目が柔らかな光を宿す。彼の肩に乗るキルシュはその光景を楽しそうに見て、からかうように口を開いた。
「あら。私の友達とは言ってないわよ」
「そんなぁ」
決死の覚悟で言ったのに、キルシュからは軽く跳ね除けられて、ガッカリする。それも彼女はザムゾンに意地悪を言うつもり満々なのが判るから尚更だ。
「私の守護者になるんでしょう。シャンとしなさい。ザムゾン」

まるで姉が弟に諭すようにキルシュは言う。
再び驚いたのは大神官だ。
「嘆く竜の守護者ですと！こんな子供が…力の欠片すらないというのに、どうやって守護すると言うのです」
「それは、これからこの子が頑張るみたいだわ。私はその決意に報いることにしたの。つまり、護らせてあげると約束をしたわ。それ相応のことをこの子はしてくれると信じている」
「……キルシュ」
「『嘆く竜』殿にもそこまで言わせるとは。この少年見かけによらない潜在力を持っている訳ですな」
「そうよ。これからは丁重に扱って頂戴」
「かしこまりました。今後はこの神殿の大切な客人としてザムゾン殿を丁重に扱いましょう」
「よろしく頼む。ザムゾン。行ってくる。また会おう」
大神官の言葉に鷹揚にうなずき、ザムゾンに声をかけるとアナトールは踵を返した。
三人の男性はしっかりとした足取りで神殿の奥へと向う。
遠くなっていく。
アナトールの肩からキルシュが舞い上がり、ザムゾンの肩に留まった。周囲に聞こえないような小さな声で言葉を残した。
「すぐ戻ることになると思うわ。多分二ヶ月か三ヵ月後…戻ってきた時のアナトールはまた変になっていると思うから、その時はお願いね。色々言ったけど、あなたのこと頼りにしているのよ。あんなに楽しそうなアナトールは久しぶりだったから」
「僕はアナトールの力になれるのでしょうか？」
「あなたしか出来ないわ。あなたは特別なのよ。ザムゾン」
「僕が特別…？」
「そう。だからそのままでいいの。そのままでいて。ザムゾン」
キルシュは言いたいだけ言うと、あっさりと肩から舞い上がった。高い高い天井まで到達すると神殿の奥へと滑るように飛ぶ。三人の

男性を追い抜き見えなくなっていった。
ザムゾンは彼らを見送りながら、キルシュの言葉を反芻していた。

その１６（後書き）

今日もなんとか更新～！！そして少しだけ話が進みました。
次回は来週の木曜日更新予定です。よろしくお願いしますｗ

その17

彼らの姿が視界から消える。
周囲を見回すと煤だらけの壁や天井。
中途半端に焼け残った庭の調度品が火事や戦禍の跡のような無残な姿を曝している。
周囲で動くものはない。
ただ一人この場に残されたザムゾンは、独りである事を強く感じ、今自分が体験したことはまるで夢の事のように思えた。
胸に手を当て俯く。
軽く目を瞑り自身を探ると、さっきまで力に満ちていた体内が今は空っぽになっていた。
頼りなく心細い、いつもの感覚。
さっきまで感じていた充実感が、今はもうどんな風だったのかも判らなくなっている。
跡形もなく消えている。
…もしかして本当に夢だったんじゃないかな？
…それか幻覚。
魔術の行われる場所だし、妖しげな薬も使われると聞く。その影響で存在しないものを見て、ありもしない事を経験した気になってしまったとも考えられた。
ボンヤリとその場で立ち尽くしていると、極近くで声をかけられた。
「ザムゾン様ですね」
顔を上げると優しい笑みを浮かべた青年が立っていた。長い上着に独特な文様の刺繍が施され神殿の人だとひとめで判る。
彼はまるでザムゾンが高貴な人であるかのように恭しく礼をする。

淀みなく美しい所作。
服装を見ても動作を見ても、自分よりも何倍も立派で上等な人だと判る。その彼がザムゾンに敬意を払っている。
ザムゾンは呆然とした顔のまま固まった。
そんなザムゾンを見ても、青年からは軽んじるような様子はなく、暖かい微笑みのまま口を開いた。
「お送り致します」
「どこへ？」
「ザムゾン様のご自宅ですよ」
アナトールとの事が夢や幻覚でなければ帰宅を促されていたのだから、すぐに思いついてもよいものだったが、こんな扱いをされたのは初めてだったから、ザムゾンは驚愕の中で思いつけずにいた。
青年の言葉を聞いて、ようやくアナトールと出会い言葉を交わした事が現実だったと実感する。
そしてアナトールと友人になった事。この国の重要人物と友人になってしまった事の意味が判りはじめた。
「ザムゾン様。どうなさいました？」
「ああ…家…家に帰るのですね。判りました」
青年に尋ねられ、ザムゾンは慌てて答えた。
青年はザムゾンの答えを聞くと、まるで当然のように「では此方へ」と帰り道へと導こうとする。行きに徒歩だったのに、これでは生まれてこのかた一度も乗ったことのない馬車で叔母さん宅である宿屋へ帰ることになる。旅人が街の外で使うならば平民でも乗ることはあっても街の中で使う者はいない。
「あ…でも、僕一人で帰れます。出口は判ってますから」
「そういう訳には参りません。私は霜刃さまの命を受けて参りましたので…」
丁寧だが有無を言わさない態度に押し切られて、ザムゾンは生まれて初めて馬車に乗った。
貴族や皇族の邸宅の家具のような、見事な彫刻や飾りの施された

馬車。これはまるで動く豪邸だ。ザムゾンは座り心地の良い座席に座って思った。
予想通りザムゾンは、周囲の好奇の目に注目されつつ叔母の宿屋に戻った。
青年は詳細は告げず、要人との貴重な会話に対する敬意だと説明し、叔母夫婦はザムゾンが珍重されたことを不思議に思ったが、ザムゾンが「そのままで話したら面白がられた」と言うと何故か納得していた。

ザムゾンの日常は戻ってきた。
叔母夫婦を手伝い、宿屋の仕事をして日々は過ぎていく。
だが、当の本人は事あるごとに、アナトールとキルシュと話したあの時間を思い出していた。
気がつくとあの時に心が戻っている。
再会の約束が果たされるのを心から待ち望むようになっていた。

その17（後書き）

ね…ねむい…
時間管理がうまく出来ず微妙な状態で更新です。
でも話は少し進んだので、良かった。
次の更新は明日の予定です～w

その18

宿屋の手伝いをしながら、ザムゾンは宿泊している修道士や街の人から神殿の事と長く続いている戦争の事を積極的に集め始めた。

戦争に関しては、普通に旅人達の間で交わされる話以上の収穫しかなかった。

宿屋の手伝いで小耳に挟む程度の話。

それは国境近くにはいつも大勢の兵士達が配置され、緊張状態が続いており、一年に何回か大規模戦闘が行われるのだが、日時に関して知ることは難しいという事だ。

そもそもこの街は国境からかなり離れている。

街の中心は神殿で、この街に暮らす人々のほとんどは神殿に関係することで生計を立てているとも言える。

国は幾つもの神を崇め大きな街ではそれなりの規模の神殿を持っているが、その中で一番力を持ち神殿の規模も大きいのがこの『風の街』だ。

国の成り立ちに大きく関わった『嘆く竜』と呼ばれるドラゴンを祭る神殿。

その神殿がこの街の中心に位置する。

そして神殿に勤める神官達は世襲して代々その仕事をしている人と、修道院で学び修道士となってから勤める二つのなり方があるらしい。

世襲で勤める人たちは、その人達用の神官の学校があり、まれに街の中で優秀な子供がいると街の有力者から学問の手ほどきを受けた上で、神官の家の養子となってその学校に通う。

そんな子供を出した家は養子として出す時に多くの謝礼を受け取

る上、神官として活躍すれば生家として優遇される事もある。
情報を集めていると、ザムゾンの近所でもそんな人が少なからず存在していた。
街の人はそうなる事を名誉なことだと認識していた。
その反面、修道院から神官になる道は不人気だった。
修道院に入るのに資格は一切なく、ただ世俗から隔離されて貧しく清い生活を強いられる。
あまりにも生活が厳しいから入る人は孤児や相当の事情がある場合が多いらしい。
その上、修道院に入っても、街の神殿勤めなどの安定した生活が出来る者は少なく、毎日の食事にも事欠く辺境の街への勤務や従軍する者が多い。生家に対して見返りが少ない上、本人も安定した生活が営めないため積極的に入る事はなかった。
そもそも食べるための選択ならば、街の中でも溢れている。
他の街から巡礼にくる貴族や平民・修道士たちが多く、仕事は数多に存在している。
身寄りがなくても小さい店や職人の下働きならばすぐにつく事が出来る。規模が大きい場所ならば住み込みの職もあるし、安い上長く宿泊できる宿も存在している。
年に一度の収穫祭の時期は周辺地域から沢山の観光客が来るから宿泊場所に事欠くこともあるが、それ以外であれば、食うに困ることもなく住む場所にも困らない。
身一つで来て街にきちんとした住まいを構えるにはハードルが高いが、十年も下働きすれば集団住宅の一角に自分の場所を設ける事が可能だ。長く働き所帯を構える人も多い。
人や物の交流が多い故、流行り病のリスクが他の街よりも高いといっても、安定した生活が送れるという意味でこの街は人気があった。

待ち人を待つ一日は長い。

だ　が一週間や一ヶ月と言った長い時間は振り返ると、あっという間に過ぎて行った。
一ヶ月ほど経った頃、ザムゾンの元に一人の神官が訪ねてきた。
神殿から送ってくれた青年だ。
叔母が用向きを聞き、宿の一階にある食堂で料理を運ぶ手伝いをしていたザムゾンが呼ばれた。聞けば荷物を渡す用事で来たという。
入り口で立っていた青年は神殿で見た服ではなく、修道士が着る闇色のフードのついた長衣を着ていた。
顔色は優れないようだったが、ザムゾンの顔を見ると以前と同じ柔らかい笑顔を浮かべ丁寧に挨拶をする。
そして茶色で艶のある紙に包まれた荷物をザムゾンへと渡した。
「霜刃さまからです。滞在は思ったより少し長引きそうだと、言付かりました」
用件だけ言うと、彼は立ち去ろうとする。
ザムゾンはせっかくだから食堂でお茶でもどうかと誘ったが、急ぐ用事の途中だからと丁寧に断られた。
引止めがてら、アナトールのことを幾つか尋ねたが、彼は曖昧な答えを返すだけで。詳しいことは何ひとつ教えてくれなかった。
ただ話した内容を考えると彼がアナトールに付き従い、戦場でも近くに居るという事が判っただけだ。平民の子供には何の力も無い。彼の力になれる事は何もない。それが判って悔しい気持ちになる。だけど実際ザムゾンに何が出来るかと問われたら何もできないのだ。それが判るから更に悔しい気持ちになる。自分の無力さが何よりも腹立たしかった。
仕方なくザムゾンはいつも首から提げている小さな皮袋を青年に差し出した。
袋の中には街のまじない屋から買った、金運や幸運を運んでくれるという触れ込みの小さな小さな虎目石が入っている。
商売繁盛のためのお守りだが。ザムゾンが持っているのはそれだけだから仕方ない。

だがこの石はいつも肌身離さず持っているから、自分の分身とも言える。魔術は知らないが、人の思いは物に篭るとまじない師が言っていた。それが本当ならばザムゾンの思いもこの石に宿っている筈だ。何かの役にでも立てば。否。役に立てなくても、自分がここで待っていると知ってくれるだけでいい。アナトールが無事で、帰ってきてくれればいい。

差し出しながらザムゾンは青年に言った。

「アナトールに伝えて下さい。ずっとずっと、待ってます。貴方と話しをするのを楽しみにしています…と」

その１８（後書き）

読んで頂きありがとうございますｗ
何とか金曜日中に更新（大汗）

来週はＧＷでお休みします。
次の更新は５月１２日（木）の予定です。
よろしくお願いします。

その19

一抱えある包みは大きさの割りに軽かった。

青年が立ち去った後、ザムゾンは叔母に断って自室に戻った。時刻は夕食前の準備に入ろうかという頃で、宿屋の仕事は一段落した上、簡食堂での客も全ていなくなっており、しばらく休んでいいと言われた。

贈り物の中に手紙でも入っているかも知れないからゆっくり休みなさいと声をかけられ、もし読めない言葉があるようなら今宿泊している学のありそうな修道士に文字を読んでもらうよう頼んでみるとまで言われた。

買い物や日常生活に関わる単語以外、ザムゾンは理解できない。叔母夫婦は読み書きや計算は出来るが、それは簡単なものに限る。

修道士達が多く泊まる宿屋という性質上、庶民が目にすることも珍しい本は日常で目にする物であるし、何より手紙をことづかる機会も多い。

学校などは貴族や街の中でも選ばれた人だけが通える場所だから、行く人は少なく叔母夫婦が通えたとは思えないが、仕事をしているうちに簡単な文章は読めるようになってもおかしくない。

それに修道士達は総じて親切で博学で面倒見が良い。

自分の時間が許す限り、尋ねれば答えるし、希望すれば教えてくれる。

ザムゾン自身も宿屋の仕事を手伝いながら、日常で感じる疑問を客に聞き懇切丁寧に教えてもらっている。薄皮を一枚一枚重ねるように、知識を少しづつ積み重ねている。

自分と同じ方法で大人になったとしたら、それだけでも文字に関

してかなりの知識が得られているだろう。叔母夫婦が文字が使えるのはそんな理由だとザムゾンは思っていた。
自室である屋根裏部屋に入ると、早速ザムゾンは包みを開けはじめた。
艶のある油を染み込ませて乾かした、撥水効果のある紙に包まれた荷物を。
ズボンのポケットからザムゾンはよく手入れされたナイフを取り出した。
それは手を広げたくらいの刃渡りで、装飾のないシンプルな古いナイフだった。
肌身離さず持ち、手に馴染んでいる。
叔父さんが自分が子供の頃に父親からもらい大切に使っていたというナイフ。
それは切れ味を落とさないように丁寧に手入れし磨いでいるから刃が徐々に減っており、今では元の半分くらいの細さになっている。
手に良く馴染み自分の一部になっているみたいに感じる。
ザムゾンはこのナイフを大切に使って、可能であれば自分が叔父からもらったように自分の子供に渡したいと思っていた。
だが残りの刃の幅で考えると自分が使い潰してお仕舞いのような気もする。
何より、まだ仕事は手伝いに毛が生えた程度のものだし、一人前になって相応の稼ぎをもらえるようになるか、自ら何かの仕事を始めて自分で稼いだ金で物を購入することが出来るようになるには、まだまだずっと先のことになる。
それまでは大切に使っていかなければならない。壊れたからと言って代えはなく、必要な時に借りるしかなくなるからだ。
縛った紐をナイフで切る。
瞬間、風が吹いた。
窓を開けた覚えはなく、窓に目を向け確認したが窓はしまったままだ。

部屋に入った時に部屋のドアは閉めたから、何処にも風が入ってくる隙間はない。
ザムゾンは驚いて部屋の周囲を見回した。
が、部屋は何も変った様子はない。
何度も何度も部屋を確認したが、部屋は見慣れたいつもの自分の部屋のままであり、穴が開いているなどといった困った問題など見つかりはしなかった。
ザムゾンは気を取り直して包みを開く。
茶色の包み紙は、油を染み込ませ乾かしたもので、包みを開くたびカサカサと乾いた音を立てていた。
水に濡れないようにと、厳重に包まれている。
その包装と重さとかさばり具合から、開けるまえから中身は布製品だろうとザムゾンは考えていた。
広げてみると、真っ青な空が広がった。
それは目が覚めるような澄み切った空の色に布だった。
綿か何かが入っているのか厚みがあり柔らかい。
布の中央には黄色の鳥が舞っていた。
翼を広げて大空を飛び立とうとしている。
布の周囲には鳥を囲むように変った形の葉が刺繍され、所々に色とりどりの花や果物が刺繍されている。
見たことのない鮮やかな色彩にザムゾンは目を奪われた。
しばらくその美しい布を鑑賞していたが、ふと我に返り包み紙の中に手紙が無かったか確認する。
広げて裏返して確認したが、残念ながらカード一枚入ってなかった。
期待していたからガッカリしたが、もし難しい文章で書いてこられて読めなかったら、今よりももっとガッカリする気がする。これで良かったのだとザムゾンは自分で自分を納得させた。
美しい布を見つめて。遠くにいるアナトールを思う。何故か彼の気配が品物に残っているような気がした。

その１９（後書き）

先週はお休みいただきました。
今日から通常運転です。

次の更新は明日です。
よろしくですｗ

その２０

贈り物が届いたきり、日々は過ぎていった。
アナトールからは何の音沙汰はない。
だが、ふとした拍子に誰かに見られているような気がする事が増えてきた。
時々、視線のような気配のようなものを感じる。感じた方向に目を向けて、何かが見えたりなどの変化はないが、それでも思いすごしとはとても思えないような感覚を感じることが度々あった。
それはアナトールの贈り物が届いた日から起こったため、彼が術を使ってアナトールと自分を見えない糸で繋げてくれているように思っていた。そうであって欲しいと思っている。
力の無いザムゾンには自分から彼に会いに行くことは無理だ。アナトールから手を伸ばしてくれなければ再会することは叶わないだろう。
伝説でしかなかった存在との邂逅は不可能だろう。ザムゾンは宿で手伝いをしながら、伝説の「嘆く竜」と「唄う鳥」の情報も集め始めた。
もしかしたら自分の知らない知識を知っている人もいるのではないかと思ったからだ。
それに、今まではザムゾン自身の中で心の整理が出来ず、余計な事を言わないで話を聞くことが出来るのか不安だったから、積極的に話が聞けなかった。黙って待っていたら、彼の方から会いにきてくれるだろうと考えていたこともある。待ち続ける日々は長く、何もしないのは苦痛だった。だから話の中だけでも彼らの存在を確認したい思いからの行動だった。
だが期待したことは起こらなかった。

ほとんどの人はザムゾンが知っている程度のことしか知らない。
中には何か知っていそうな人もいたが、その人は多くを語らなかった。曖昧に答えを濁されただけだ。彼らの存在は国家の重要な秘密になるのだろう。どう見ても一般人の少年に情報がもたらされる事はなかった。
ザムゾンに出来ることは、今は寝具の掛け布として使っている贈り物の布に向って、彼らに話しをする事を想像して、その日あった事を報告するだけだった。どこかで聞いてくれればいいと思いながら。
再び出会える日を夢見て、ザムゾンは日々を過ごした。

そして、贈り物が届いてそろそろ半年が経とうとする頃。
街では収穫祭の準備が始まっていた。
神殿の神事で一番重要かつ街の最も賑わう祭り。
その頃には国境近くで大規模戦闘が行われ、多数の犠牲者を出しながらも勝利した事実が街でも広く伝わっていた。
神殿では常よりはやや縮小された形での神事が行われるようだが、神殿の外では大きな祭りになることが予想された。
近く休戦協定が結ばれるであろう事も伝わっていたからだ。
永きに渡る戦争がひとまず止まるという事だ。街の人たちは直接戦いには関係ない場所で生活をしているとは言え、戦の度に物流が不安定になりそれが作物などに及んだ時には食事と深く関係する。遠い場所で生活していても生活とは直結しているのだ。
平和になればその不安がなくなることから、街の人たちはその事を単純に喜んでいた。
逆にザムゾンは塞いだ気分になることが増えていた。以前より口数が減っていた。
国は動いているのに、ザムゾンには何の知らせもないからだ。
最初の数ヶ月はアナトールの身を案じる気持ちが大きかったが、

今では彼の事を思い出しただけでも気持ちが沈むのを感じていた。
身分の高い人だから、単に平民が珍しくて面白がったけれど今は他の事に興味が向って自分の事など忘れてしまったのかも知れない。そんな風に思えてくる。
大切にしていた贈り物の布も最近は見ていると気持ちが塞いでしまうため、使わない服と一緒に箱に仕舞いこんで目に触れないようにしている。
時々たまらない気分になって布を引っ張り出し、指で模様をなぞり気持ちを落ち着かせるが、気持ちが落ち着くとそんな行動を起こしてしまう自分が女々しく嫌になる。
心の中で大きく根を下ろした彼の存在を持て余していた。
叔母夫婦はザムゾンが寡黙になったことを大人になってきたと評価していた。
実際、この半年で身長は伸びて体格も少年から青年に近づいているのを感じる。顔も幼さが消え、やや丸かった輪郭が細くなっている。
これから自分がどうなっていくのか判らない、そうすればいいのか判らない中、時間だけが過ぎていくのを一種の諦めと共にザムゾンは感じていた。

その夜は、どうにも心が落ち着かずベッドの上にあの布を広げていた。
すっかり憶えてしまった模様を見つめているだけでも心が落ち着く。
今アナトールがどう思っているかは判らないが、この布を送ってくれた時、彼は確かにザムゾンのことを考えていた。それだけでいい。それだけでいいんだ。そもそも自分は彼の顔を同じ高さで見つめていい身分ではないのだから。
少しでも心が通じ合えただけでも夢のような事なのだ。いい思い

出だ。そう思うしかない。
心の中でザムゾンは自分を説得する。
指で刺繍をなぞろうとした時、白いものが目に飛び込んできた。
白いものは羽を広げ、ザムゾンの前で静止する。それは白い…真っ白い鳥だった。
鳥の黒い瞳と目が合ったと思った時、白い鳥は眩しい光を放ち忽然と消えた。
驚き目を見開いたザムゾンの前には、一枚の紙が残されていた。

その２０（後書き）

良かった…何とか金曜日中に更新できました。
少し駆け足ですが、話も進みましたし。
このままの調子で今月中に終らせ、来月からは「唄う鳥・嘆く竜」の本編第二部を再開したいと思います。できるかな？なんとかなるだろう。うん。多分（苦笑）

という事で。
次回の更新は木曜日です。
では、また来週～ｗ

その21

まるで夢か幻を見ているようだった。
目の前で起こった事が信じられなくてザムゾンは目をこする。
だが、目の前の紙は消えてなくなるという事はなく、存在し続けていた。
何度か瞬きをし目を擦って確かめて、ようやく現実のことだと実感が出来た。
ザムゾンは恐る恐る紙を観察するように見つめた。驚きだけではなく、胸の鼓動が飛び跳ねて収まらなかった。
紙の中に書かれている文字は全て読める。まずはその事にホッとした。それもそのはず、紙の中には書かれていたのは、幾つかの数字と「この場所」と書かれた文字だけだったのだ。
まるで覚え書きや走り書きのような文字は、暗号文のようにも見えるが、ザムゾンにそんなものを渡されても判らない。
日時を示していると考えるのが自然だ。
文字の筆跡に見覚えはないが、ザムゾンはアナトールだと確信した。彼に手紙を出せる人で術が使えるのはアナトール以外には考えられないからだ。
数字が思った通りの日付と時間であれば、明日の夜ということになる。
「明日会える」
口に出してみたが、全く現実感がない。
ずっと会いたかったはずだった。
今でも会いたいと思っている。だがその気持ちはザムゾンの中でも遠い思いだ。彼等が目の前に現れたら違うのかもしれないが、今はそれが本当に起こることなのか信じられない。

彼等とは特別な何かで繋がっていて、接触することで特別な関係が築けると思っていたのだが、本当にそうだろうか自分だけの思い過ごしなのではないか…と疑う気持ちが勝っている。
こんなモヤモヤした状態で会うのに躊躇っている気持ちも本当だ。
キルシュが次に会う時にはアナトールの状態が悪くなっていると言っていたことにも引っかかりがある。自分が彼に何か出来るだろうか。本当に何か出来る？
考えても仕方ない事を考える。
ザムゾンの方から思いや言葉を伝える事が出来ないから尚の事、埒の明かない事を考え続けることしかできなかった。

眠れない夜を過ごし、翌日は寝不足の頭で宿の仕事をした。
思考力が落ちているのか普段はしないような失敗を繰り返した。
注文間違いをしたり、落とすはずのないものを落としたり…それは、周囲が心配するくらいで。叔母夫婦は体調が悪いのだろうと判断して早めに仕事を上がらせた。
少し眠いくらいで体調が悪い訳でもないザムゾンは部屋の中で時間を持て余していた。
紙に書かれた時までは、まだ充分時間がある。
叔母さん達の心配を考えると外に出て時間をつぶす訳にもいかないし、何かしたいこともない。ザムゾンはベッドに敷いてある、アナトールからの贈り物の布を見つめ指でなぞる。
「本当に来るのかな」
何となく呟く。
ザムゾンの部屋には必要最低限のものしかない。
自分が寝るためのベッドに、服や小物…つまりは持ち物全てが入る木箱と椅子、壁には小さなランタンがついている。それだけだ。
それがぐるっと見回して、この部屋に置いてあるものの全てだった。
木箱は蓋がついており、それは机の役割を兼ねている。蓋の上に

はコップが二つと香りの良いお茶の入ったポットがひとつ。
コップはザムゾンが厨房から持ってそっと持ってきたもので、ポットのお茶は夜のどが乾いた時用にと叔母さんが特別に入れてくれたものだ。
体に良い効用あると言っていたが、ザムゾンにはどんな植物のものでどんな効果があるのか詳しくは判らない。
ただこの宿ではサービスで振舞われるお茶ではない料金を取る特別なお茶なのは確かな事で、知識のないザムゾンでもお茶の放つ芳醇な香りを嗅いでいると、これは他にはない特別なものだと感じる。
のどが乾けば水で潤せばいいと思うザムゾンだったが、アナトールが来た時にもてなす何かがあった方が良いと考え、その心使いを喜んで受け取った。
この部屋は人を招くような作りになっていない。
来たとしてもお茶を振舞うことしか出来ない。
こんなので準備はいいのだろうか。でもそれ以上何かが出来る訳もない。
ぐるぐると考えていると、睡魔が忍び込んできた。

部屋のドアを叩く音がする。
その音で、ザムゾンは目を開いた。
眠気の残る頭で小さく返事をする。
いつもの叔母や叔父ならば、ノックとともに声をかける筈なのに。いつもと違う。どうしてだろうと考えた時、そう言えばアナトールの手紙のことを思い出した。
一瞬で眠気が飛び去った。
うつ伏せていた体をガバリと起こすと、ドアが開いた。

その２１（後書き）

もう少し早く更新できると思ってたのですが…
いつもと同じような時間になりました。

次の更新は明日です～
よろしくお願いしますw

その22

ほんの少し開いたドアから、圧倒的な力の波が押し寄せてくるのを感じる。
それはザムゾンの内部に注がれ、彼の中の空洞を埋めていく。
しばらくは感じることの無かった己の中の空ろな部分が、満たされることでまだ存在していたのだと気がつく。
ドアの隙間から、塊が飛び込んでくる。
その塊はザムゾンの狭い部屋を旋回して、ベッドの縁に留まる。鈍色の鱗の生えた翼を持つ赤い瞳をした小さな竜。
「……キルシュ」
ため息と共にザムゾンが名前を呼ぶ。
「ごきげんよう。ザムゾン。お元気そうね」
「ええ」
キルシュは宝石のように輝く瞳をザムゾンを向け、小さく微笑んだ。迫力のある微笑みにザムゾンは見惚れた。それと共に高貴な女性に微笑まれたような、誇らしさを秘めた喜びが胸に沸いてくる。
ザムゾンがキルシュに向って話しかけようとしたところ、ドア付近が騒がしいことに気がつく。二人の男性の話声。聞き覚えのある声にザムゾンの心が震えた。
「充分に注意は払っている。私の術を信用してくれ」
「ですが。あの時は…」
「あの時と今では事情も異なる。それにもう失敗は繰り返さない。大丈夫だ」
「アナトール殿！」
「話は後だ。我が調停者。私はこの件に関しては一歩も引かないぞ。

それに私は今まで充分に我慢してきたと思うのだが。違うか」
「そこまで言われたら仕方ないですな」
「すぐに戻る」
「……ではお気をつけて」
その声を最後に話声は消えた。
すぐに長身の男性が部屋に入ってきて、ドアを閉めた。
それは危うげな空気をまとい、正装をしたアナトールだった。
深い紫色の長衣。服の全面に暗い色の複雑な文様と輪郭を彩る金や銀の刺繍が施されていた。
怖い表情をしているという訳ではないが、整った顔はどちらかと言えば穏やかに見えるような表情を作っているのだが、近づくと危ないと思わせるような空気を辺りに漂わせている。
本能がすぐさま逃げた方がいいと囁いている。
今の彼からは出会った時ほどではないが、いつ何時豹変するか判らない、ギリギリの緊張を感じる。　だが、ザムゾンは本能を超えて胸が躍り出すのを感じていた。あの美しい炎にまた出会える予感。
不謹慎な感情だが、その予感を甘美だとザムゾンは感じていた。
多分ザムゾンはアナトールの悲しみや絶望、それを体現した炎ごと彼に惹かれている。理屈のつかない気持ち。
胸から溢れる思いに押されるように、ザムゾンは声を上げていた。
「アナトール！」
彼の名を呼ぶとアナトールの視線がザムゾンをとらえる。
緊張と闇をまとった瞳がザムゾンを見つめると柔らかくとけていく。
彼の瞳の変貌を見て、ザムゾンの中で張り詰めていた何かが弾けた。
何かを考える前にザムゾンは立ち上がり、駆け寄っていた。彼の体に飛び込むように抱つく。
アナトールはザムゾンの体を受け止め、眩しいものを見るような瞳をして目を細めた。

「ザムゾン」
名前を呼ぶアナトールの声も柔らかい。
背中に回された腕がザムゾンを包む。今まで感じたことのない心地よさがザムゾンの中で広がる。
永く会えなかった事実が、そのせいで尖った心が、自分とは会いたくなかったのではないかと思っていた疑念が、アナトールの嬉しそうな声でとけて無くなっていく。
「久しいな」
「ええ本当に」
「会いたかった」
「僕もです。アナトール」
ザムゾンは返事をしながら、自分でも驚くほど甘えた声になっているのに気がついた。こんな声出した事はない。
普通なら恥ずかしいと感じてもおかしくないのだが、今のザムゾンにはそんな事は気にならなかった。
否。
そんな自分のことなど考えている余裕はない。今はただ目の前のアナトールの事を見つめ彼の事を感じたかった。
彼が会いたいと思ってくれたその事が嬉しい。
自分も同じ気持ちだと確認できただけで嬉しかった。
彼の顔が見たくなり顔を上げると、優しく微笑む瞳がザムゾンをとらえた。
ザムゾンも笑みを返す。視線が絡みあい引力が生じる。
アナトールが屈み顔を近づけてきた。
何が起ころうとしているのか判らなかったが、彼の急の接近に胸の鼓動が大きくなり、目を開けてられなる。
ザムゾンは慌てて目を閉じた。
次の瞬間。
そっと、唇が触れ合った。

その22（後書き）

何とか金曜日中に更新できました。
途中トラブルがあったので、今日こそはダメかと焦っていました。
更新できて本当に良かった。

少し話が進みましたけど。
来週で終わりそうもないです。
うわぁん（＞＜）
でも6月上旬には終るよう頑張っていきたいと思います。
次回の更新は木曜日です。
来週もよろしくお願いします。

その23

柔らかい感触に驚いてザムゾンが目を開く。
目の前にはさっきよりも更に近づいたアナトールの顔。至近距離すぎてちゃんと見えたわけではないが、そっと目を閉じたアナトール以外は考えられない。
「うわっ！」
大変な事が起こった。それだけを直感してザムゾンは一歩後ろに下がる。
少し距離を置きアナトールの姿を確認する。
ザムゾンが後ずさった途端に彼は目を開き、自らの行動に自分自身が驚いたような顔をした。
「すまない」
アナトールは顔を赤らめ恥ずかしそうに俯く。
それを見て、ザムゾンはアナトールとくちづけを交わしたのだと理解できた。
そして動揺した表情からアナトールが自覚して仕掛けたのではなく、衝動的な気持ちから行動に移したのだと悟った。アナトールに求められている。
そう感じてザムゾンの胸がざわめいた。
…もしかして、アナトールは僕のことを？
話には聞いたことがあるが、色事にはあまり興味が無かったから、これが何を示しているのか瞬間的には判らなかった。初めてのくちづけだったが、その行為自体には何の感慨もない。
触れ合わせた唇の感触はまだ残っている。聞いた話を繋ぎ合わせるとこれが特別なことだと理解できるが、ザムゾン自身にはこの行為だけで実感できるものではなかった。
ただ目の前のアナトールが困った顔をしているから、彼にとって

大きな意味があると判るだけだ。
アナトールの態度を見てザムゾンは嬉しくなる。
彼にとって自分はどうでもいい存在ではなく、大切に思われている。大事に思われている。好意を持たれている…それも特別な想い。
アナトールの態度から、彼の想いが見え隠れし、それがザムゾンの心を揺さぶった。
真っ赤な顔のままアナトールは小さな深呼吸をし、ザムゾンを真っ直ぐ見つめた。
「申し訳ない。突然、こんな事をしてしまって…もっと順番を考えて事を起こすつもりだったのだが…」
動揺し謝るたアナトールはとても可愛い。年齢ではザムゾンの方がかなり下なのに、彼に対してはそう思えなかった。
「謝らないで下さい。僕も避けませんでしたから」
「嫌ではなかったか」
「嫌じゃありません」
「そうか」
アナトールはホッした顔をした。
うっとりとした表情でザムゾンの頬を撫でる。
撫でられる気持ち良さにザムゾンが目を細めると、アナトールの顔がまた近づいてきた。
ザムゾンは再び薄く目を閉じた。
「なに子供みたいな事をしているの。アナトール。大切な用事があったのでしょう」
キルシュが呆れた声を上げた。ザムゾンが目を開くと、アナトールが眉間に皺をよせ不機嫌な表情をしていた。
邪魔をされたと言わんばかりの顔。何だかおかしくなってキルシュを見ると、キルシュはからかう訳ではなく、真剣な瞳でこちらを見ていた。本当に何か重要な用事があったようだ。
「大切な用事？」
「ああ。そうだ」

言い難そうにアナトールが言う。
「ザムゾンにお願いがある」
頼みごとと知って心が弾んだ。彼のために何かできる。それはザムゾンの望んでいた事だ。
「僕に頼みごとなの。いいよ。何をどうすればいい？僕に出来ることならなんでも引き受けるよ」
思ったまま口にすると、アナトールは複雑な表情をした。
「モチロン。ザムゾンにしか出来ない事だが…返事は内容を聞いてからにしてくれないか」
「確かに。そうでした。でも貴方が僕に無理難題を言うとは思えなくて…」
「どうだろうな」
話が長くなりそうなのに気付き、ザムゾンはアナトールの言葉を遮る。
「アナトール。座って話しませんか？」
「ああ。そうだな」
「座る場所は一客しかない椅子かベッドしかないですけど…」
言いかけて、ザムゾンは自分の普段座る古い椅子では、アナトールの繊細で豪奢な衣装を傷つける可能性に気付く。アナトールは何枚も重ねた服を着ているようなのだ。
彼の服に触れた時の厚みから厚い布地かと思ったが、触れると薄く繊細な布が幾重にも重なっているのが判る。
服が傷つくとか、そんな事アナトールは気にしないかも知れないけれど、ザムゾンは気になる。
技巧に長けた職人の技の粋を集めたような服に傷がつくかも知れないと気にしながらでは、話に集中できないだろう。
そのまま理由を言うのは賢明ではないと思い、ザムゾンは考えながら口を開いた。
「椅子は僕で丁度いいので…ちょっと小さいかも知れないから。アナトールはベッドに座って下さいませんか。せっかく僕の部屋に来

てくださったのですから、お茶でも飲んで一息つきましょう。今カップに入れますから」
「ああ。判った。ありがとう」
アナトールはそう言って、ベッドの前に立つ。
彼の目の前には彼が贈った青い布が敷かれている。
「大切に使ってくれているのだね」
嬉しそうにアナトールは呟いた。

その２３（後書き）

一週間あっという間ですね。今日も何とか更新（^^;）
次の更新は明日ですwよろしくお願いします！

その２４

「モチロンです。貴方が僕に下さったのだから」
アナトールを喜ばせることが出来た。それだけでも出しておいて正解だった。ザムゾンはお茶を入れたカップを差し出しながら思った。
「来客用の茶器でなくてスミマセン…でも公の使者から連絡無かったという事は誰にも秘密の訪問なのかと思って。叔母夫婦には何も言わなかったので準備出来なかったんです」
アナトールはザムゾンが差し出したカップを嬉しそうに受け取ると、ためらうことなくそれどころか満面の笑顔を浮かべて、カップに口をつけた。
「そうよ。よく判ったわね」
ザムゾンの言葉にキルシュが答えた。
「それくらい。少し考えれば判りますよ」
「まぁ。ザムゾン。やっぱり貴方は聡い子ね」
「ありがとうございます。キルシュはこちらにどうぞ」
テーブル代わりの箱の上のカップを示し、ザムゾンは得意気に口を開く。
キルシュは翼を広げ舞い上がると、ザムゾンの示した場所へと重力を感じない動きで降りた。
「少し見ないうちに大きくなったわ。ありがとう。この子は本当にいい子だわ」
キルシュは面白そうにカップを観察すると、カップに首を突っ込み口をつけ、器用にお茶を飲み始めた。
まるで湖水の水を飲むような動作。

彼女が大きなドラゴンだったら、河や湖からこうして水を飲んだのだろうという姿だった。
鳥や獣の動きと重なるが、違っているのはそんな姿を見ても優美に見えるところだ。
下品な音も立てず、貪るような動きもない。
静かに美しく味わっている。
顔を上げると、彼女は嬉しそうに微笑んだ。
「美味しいわ。ありがとう。ザムゾン。とても芳醇な香りね。アナトールもそう思うでしょう」
言葉を振られてアナトールはうなずいた。
「そうだな。良い葉を使っている。心使いありがとう」
「そんな。これくらい。大した事ないです」
照れながらザムゾンは椅子に座った。
アナトールの正面に座ることになる。
とは言え、ベッドと箱と椅子を置いただけで丁度よい空間になるくらいの狭い部屋だから、アナトールとは極近い距離で対面していることになる。
アナトールがお茶を飲み終え、手の中で転がしているのを見て、ザムゾンは口を開いた。
「それで僕にどんなお願いがあるんですか？」
彼から言い出すのを待っても良いが、何となく言いにくそうにしていた様子だった。そして決定権はこちらにある。彼の力になりたい思いはずっと変らないのに。
どうしてか判らないがアナトールはその事に自信を持てずにいるように感じるのだ。
だから、こちらから聞いてあげた方がいいのではないかと思ったのだ。
「まず、話をする前に聞きたい事があるのだが…」
「何ですか？」
真っ直ぐ見つめると、アナトールはザムゾンの視線から目をそら

した。直視できなかったようだ。アナトールの視線は、両手で包み込んだカップに注がれる。
「ザムゾン。お前は私の友達になってくれると言ったが…私が力を失っても友達で居てくれるか？キルシュと離れて一人のただの人間になっても、同じように言ってくれるだろうか」
まるで独り言のようにアナトールは言った。
これは彼の恐れている事だ。ザムゾンには判った。だが言った内容がピンと来ない。
言葉の上では判ったが、どうしてそうなるのか理解出来ない。
「……力を失う？」
「ああ。そうだ。お前は大いなる魔力を持ったドラゴンのキルシュに憧れ、私の力に魅せられたのだろう。実際、私には、この力しかない。力を失った後に自分に何が残るのか判らないのだ」
途方に暮れたようにアナトールは呟いた。
彼の持つ力は国を護る大いなる力だが、ある意味では平和を脅かす脅威でもある。
平和が訪れようとしている、この国で彼の存在意義が揺らいでいるとでも言うのだろうか。
何かが起こっている。現在進行形で彼の身に何かが起ころうとしている。
ザムゾンは不穏な空気を察して不安に心が揺れたが、それと同時にそんな時に自分の助けを求めていると悟って嬉しくなってくる。自分のような小さな存在でも彼の役に立てる。
確かに出会った時には、あの強大な力に魅せられた。だが、あの場をずっと動けなかったのはアナトールの哀しそうな姿に心を囚われたからだ。
今もそうだ。ザムゾンは哀しげな彼を放っておけず、立ち上がって歩み寄っていた。
手の中のカップを取り上げると箱の上に置き、アナトールの手を掴み握って隣に座る。

「どんな貴方でも、あなたは貴方です。僕にとって変りはありません。僕に出来ること言って下さい」
アナトールは迷うような目をした後に、顔を上げた。握られたザムゾンの手を握り返すと寂しげな微笑を浮べ、口を開いた。
「……霜刃を手放すことになった」

その２４（後書き）

次の更新は来週木曜日です～
予定がズレ込んでいますが…来週か再来週には終りそうな気がしてきました。
次もガンバリマスｗ

その25

アナトールの口から出た言葉に驚く。
彼の持つ『霜刃』という魔法の力は、国家にとっても大切なものだし、沢山の仲間の犠牲の上に完成したものだ。
そう簡単に手放せるものではないだろうという事はザムゾンにも判る。それに、一度持った力を手放すことが出来るのだろうか。
想像もつかない。
「どうして…そんな……？」
「戦いは終った。取りあえず…な」
「それは知ってます。戦いに大勝利して休戦協定が結ばれるとか。それは本当なのでしょう？」
渋い表情をアナトールは浮べた。
ザムゾンが街や宿泊客から聞いている話とは違っていそうだ。
「休戦協定に関しては正しい情報だな。だが、戦いに大勝利したという情報は、真実とは少し違う」
アナトールはそこまで言って、言葉を区切った。小さくため息をつく。疲労感がにじみ出ていた。
「最終的には私は『霜刃』を発動し、敵兵に多大な犠牲を出したのは確かだが…我が軍にもかなりの犠牲者が出た。調停者を失い、私はしばらく動けずにいた。今の調停者は彼の父親となった」
調停者と聞き、ザムゾンの脳裏に神殿で出会ったアナトールを信奉する青年と大神官と呼ばれた男性の姿が浮かぶ。調停者の彼が殺され、その役目を父親が継いだのか。
そう言えば、アナトールが部屋に入って来る時に聞いたことのある声がした気がした。
あれは元大神官の男性の声だ。
記憶の中で声の主が繋がった。

「それで、何故あなたが力を手放さなくてはならなくなったのですか？」
「敵国である…彼の国について、ザムゾンは何か知っているか」
「いいえ。長年戦っているということ以外は」
「それはそうだな。その認識は正しい。彼の国はとは、それなりの均衡を保ちながら戦いを続けていた。戦争とは外交の一手段だ。少々荒っぽい方法だが…両国間の間で意見の一致を見ないときに外交手段として行われていたに過ぎない。だが、私が生まれる少し前からその様相は変った。均衡を破ったのが、彼の国の国王だ。彼は自ら闇の力と同化し、戦いに利用した。その技を開発した。今となっては前国王の話になるのだが」
「前国王？」
　アナトールの瞳が冷たく輝いた。
　剣呑の色を帯びる。
「ああ。私が国王達を葬り去った。前線に復活して私が最初に行ったことは、彼の国王を葬り去り、彼の術の継承者達も葬り去ることだ。指揮系統をつぶしてから戦場で力を振るった。今国王を名乗っているのは力を持たぬ彼の息子だ」
「国王を葬り去った？」
「そうだ。そして休戦協定を結んだ。その際に私も術を捨てることになった」
　話の流れにザムゾンはついていけない。
「どうしてそうなるのか理由が判りません」
「彼の国と我が国が対等の関係になるというのが、そもそも我が国の方針で方向性だ。それは変らない。私は彼の国の前国王を倒し、それに連なる者を葬り去ったところで、役目を終えたのだ」
　何かを思い出すような瞳で、遠い過去を見つめる瞳でアナトールは語った。
「次同じ力を持つものを生み出そうとしても、少なくとも後十数年はかかるだろう。そろそろ私も引退しようと思って…な」

「……そうですか」
「大きすぎる力は味方にとっても脅威だ。平和を作り出すのに私の力は必要ない。今の調停者殿は、そもそもこの力に反対の立場だが…私は自分の役目を終えた今、同じ意見だ」
「そして」…と、アナトールは繋げた。
「私の対峙した前国王は人ではなかった。人の姿に戻れるかどうかも怪しい状態だった。私も暴走している時は、ああなのかも知れないが…ゾッとした。もういいんだ。もうこの力を手放したいと思っている」
小さくポツリと言った。弱々しい声。彼に似つかわしくない声を聞いて、ザムゾンはたまらなくなる。握り締めた手に力をこめた。

その２５（後書き）

何とか更新…
続きは明日になります。

その26

沈黙が周囲を包む。柔らかく優しい沈黙。
握ったてのひらから徐々に緊張が解けていくのをザムゾンは感じていた。
アナトールの視線がザムゾンに注がれる。
熱を帯びた瞳。その目を見て、ザムゾンも自らの熱が上がるような気がした。
「ザムゾン」
「なに？」
「私のところに来てくれないか？」
「えっ！」
まるでプロポーズのような言葉。予想しなかった事にザムゾンは驚いた。そんなザムゾンを見てアナトールは少し困った顔をした。
「今は無理だが…一年…いや、二年後くらいで私の出来ることは終る。その後に、私とキルシュの世話をお願いしたい」
「もしかして。それが僕に頼もうとした事ですか？」
「そうだ。平和な生活というものを私は知らないのだ。それを私達に教えて欲しい。私を助けてくれないか？」
アナトールが求めているもの。それを自分が持っている。改めてそれを感じた。
自分の今までの生活の延長。平和になった時に穏やかに生活する事。どれもが多分アナトールは経験してこなかった事だ。
「ええ。判りました。そんな事で良ければ」
愛の言葉自体はなかったものの、求愛されている。そう感じる。それは悪い気持ちではない。むしろ嬉しく誇らしい。

座っているのに、体が宙に浮かぶような喜びを感じた。
彼に好かれ愛されているのなら、その気持ちに応えたいと思う。これが恋愛感情なのかはザムゾンには判らない。だが、彼から求められるのであれば何でも応えたいと思う気持ちがあるのは本当だ。
「ありがとう」
ザムゾンの返事を聞いて、アナトールは嬉しそうに微笑んだ。瞳の中の熱が温度を上げる。
彼の顔が近づいてくる。くちづけの気配を感じて、ザムゾンは自然と目を閉じた。
だが、その瞬間は訪れない。
不思議に思って目を開けると、アナトールは困った表情を浮かべ距離を離した。
与えられると思っていたキスが中止され、何となくガッカリする。上がっていた熱が急激に萎んでいく。
彼が何を考えているのかザムゾンには判らなかった。
さっきキスを交わした時に彼は順番が違うと謝罪した。まだ何かザムゾンの知らない順番にこだわっているのだろうか。それとも他に何か理由でもあるのだろうか。
ザムゾンは不安に駆られ口を開いた。
「アナトール。貴方は僕のことを好きなんですよね？」
直接的な問いかけに、アナトールは目を丸くし、すぐにおかしそうに噴出した。
「全く…本当に…お前は予想がつかない」
…こんな事オトナは聞かないかも知れないけれど。
言葉で確認せずに理解できるほど、ザムゾンは大人びてもいない。
姿はすでに青年のそれに近いが、中身は年齢のままの少年だった。
アナトールの反応は、茶化しているように感じて、小さな怒りが生まれる。
「どうなんですか？」
「そう怒らないでくれ」

ザムゾンの尖った声を
「私はお前のことが好きだ。愛していると言ってもいい。ハッキリした言葉で表すと、私のものにしたい」
「……なら…」
愛の告白が欲しいと訴えるザムゾンに、アナトールは哀しい目をした。
「だが、今はこの言葉を言えない。言う資格はないのだ」
「どうして？」
「どうしても」
アナトールの頑なな態度に言えない何かを感じる。
「私は長い期間お前を束縛しようとは思っていない。迎えに来た時に神殿に来て、数年間私の世話をして欲しい。その約束だけしてくれればいい」
ちょっと突き放したような言葉にザムゾンの心は傷つく。
だから、思いとは裏腹の意地悪な言葉がザムゾンの口から飛び出した。
「待っている間。僕に恋人が出来てもいいのですか？」
「困ったな。そんな風に言わないでくれ」
握られた手をさりげなく解いて、アナトールはザムゾンの頬を撫でた。慰撫する動きはささくれ波立った心を凪いだものに変えていく。
「だったら。貴方の言葉を下さい」
「ダメだ。これは自分としてのケジメだから。どうしてもというのなら…さっきの返事に良いと答えるしかない」
「良いって事は」
「自由だよ。お前は」
切ない色を浮べてアナトールは言った。
「私に縛られず時を過ごしなさい。恋愛することだって自由だ。その選択は私を苦しめるだろうが、お前は自分の心に従って生きていけばいい。そして、迎えにきたら私の元に来て欲しい。一度私の元

に来たら、今度は全力で口説くと思うが…それに応えるか、応えないか。どうかはザムゾン、お前が決めることだ。私には強要できない。私が出来る事は神殿にお前を迎える準備をする事だけだ。それでは駄目だろうか」

おそらく何らかの事情があるのだろう。

彼は彼なりの誠実さで、ザムゾンを愛し求めている。これ以上は求める事は出来ないだろう。これでいい。これが彼の精一杯なのだ。

「判りました。僕。待ってます。アナトール。貴方のことを。きっと迎えに来て下さいね」

ザムゾンの返事を聞いて、アナトールはホッとして心底嬉しそうな笑みを浮べた。

アナトールがザムゾンを迎えに行ったのは、それから一年半が過ぎた頃だった。

その２６（後書き）

今週の更新も終わりです。
よかった。予定のところまで何とか辿り着きました。

来週、エピローグの予定。
次の更新は来週の木・金曜日です。

エピローグ　1

「久しいな。ザムゾン」
目の前のアナトールは、全てを吹っ切ったような爽やかな顔をしていた。
眩い笑顔。今まで見たことのない笑顔はザムゾンの胸をいっぱいにした。
懐かしい力の漣をザムゾンは感じる。その波動が全身に広がっていく気がする。気持ちいい。心地良い。
放たれる力にも変化があった。圧倒的な力には違いないのだが、それに丸みを帯びた柔らかさを
立ち姿に違和感がありジッと観察すると、それが腕が曲げられているせいだと判る。
一瞬、腕を怪我して曲げたまま固定したのかと心配したが、よく見るとそうではない。
腕の中に小さな荷物を抱えている。何かを持っている。そう確認できた。
腕の中の物を不思議に思う気持ちはあった。
どうしてこの時この場所で彼が持っているのか。よく考えれれば何かを示していることも判ったかも知れない。
だが、その時のザムゾンはただ再会出来た喜びが胸いっぱいで、それ以外のことを何も考えられなかった。
「アナトール」
…会いたかった。あいたかった。ずっと会いたかった。
そう遠い距離でもないのに、気がつくとあふれる思いのまま駆け出していた。

久しぶりの神殿。通された部屋は思ったよりも小さく質素な部屋だったが、平民の家屋や店などよりはかなり広いもので、一度訪問した時には広い中庭と通路しか通らなかったから。場所に関して疑問を呈する知識はない。

一度目も二度目も、どの訪れも自分から望んだことだ。だが今回は思いの強さが違う。覚悟も全然違う。

一生この神殿で暮らすことになってもいい。そう思っている。アナトールの方からそうハッキリと求められた訳ではないが、彼から求められる限りザムゾンは一生彼の傍にいるつもりでいた。何があろうと。

会えない間にアナトールから来た手紙は両手で足りるほどだった。一方ザムゾンは毎週のように手紙を送っていた。だが、それでも彼の言葉を信じられたのは、彼の気持ちを信じられたのは、後に定期的にザムゾンの元を訪れる修道女の存在が大きい。

再会を果たした後、ザムゾンは自分の口からアナトールとの約束を叔母夫婦に話をしたのだが、小さく笑われた。それが真実だとは理解してもらえなかった。

ザムゾンの言葉を軽んじている訳でなく、内容があまりにも荒唐無稽だから信じることが出来なかったのだ。

何の教育も受けず、見目が良い訳でも、魔力などの特別な力を有している訳でもない。

極平凡な少年にしか見えないザムゾンがどうして神殿に召しかかえられるのか、皆目検討がつかなかったのだ。

その上、あの時の再会はアナトールが魔法を使って直接部屋に訪問し帰っていった。彼の訪問を目撃した者は誰もいない。また、あの日のザムゾンの様子がおかしく周囲の者みんなが体調不良だと思っていた事実と相まって、病気のせいで変な夢でも見たのだと思われたのだ。

だが、その数日後に神殿から正式に申し入れがあり、彼が神殿で仕事に携わることが決まった。国家の益になる可能性を持った能力

を有しているという理由だったが、それが単なる方便であることはザムゾンは判っていた。
叔母夫婦は不思議に思いながらも純粋に喜んでくれた。
それから週に一度程度、神殿で住むために必要な基礎教育を施しに派遣されたのが年老いた修道女だった。その彼女にアナトールへの手紙を託した。
彼からの返事は丁寧な文字と優しい言葉で書かれた文章だったが、内容は誰が見ても構わないような出来事を綴ったものばかり。
世間話の延長のような手紙からアナトールの気持ちをつかむことは出来なかった。
だが戦場に居た時のように安否も確認できなければ、何の連絡もないよりは充分にマシだった。
それに彼女はアナトールが若い頃を知る人物で、ちょっとした好みや若い時の失敗談などを教えてくれた。それを聞いているだけで物理的な距離は関係なくなっていく。彼がさらに自分に近くなった気がしていた。
彼女から神殿内での作法やしきたりを学び、ザムゾンの強い希望で読み書き計算も教えてもらった。毎週の手紙はその成果の報告でもある。
一年半の期間は、あっという間に過ぎていった。
ザムゾンがアナトールに駆け寄り近づくと、腕の中のものの正体が何か判かる。
それは、生まれて間もない小さな小さな赤ん坊だった。ザムゾンの足がピタリと止まった。
ザムゾンの視線に気付き、アナトールは神妙な表情をした。少し困っているようにも見える。
彼の腕の中の赤ん坊も眉間にしわを寄せ、居心地が悪そうにモゾモゾと動いている。
彼の抱え方はどこか変に力が入った歪な抱え方で、赤ん坊も居心地が悪いのだろう。

小さく訴えるようにグズると、泣き出しはじめた。大きな泣き声を聞いて、アナトールは慌てて抱え直す。その手つきは危うい。見ていられない。

「そんな抱え方じゃダメですよ」

ザムゾンは無意識にアナトールの方に両手を差し出していた。

すぐにザムゾンの腕の中に大泣きする赤ん坊が納まる。街で暮らしているときには、近所の子供をあやすことも多かったから、ザムゾンは慣れた手つきで安定するように抱えなおした。

安定すると赤ん坊は、すぐに泣き止み機嫌の良い表情を浮かべ、はしゃぐ声を出した。見開かれた大きな瞳が、ぼんやりとザムゾンを見つめニコニコと笑う。すぐに懐いた赤ん坊は可愛い。腕の中に納まる愛らしい存在。幼い頃に亡くなった妹を、ふと思い出す。

落ち着いて腕の中の赤ん坊を観察する。

その中から大きな力の存在を感じた。赤ん坊から溢れて出ている。この感じ。知っている。どうして？

疑問を口にしようとアナトールを見ると、彼は真剣な目をしてザムゾンが口を開く前にこう言った。

「私の娘だ。ザムゾン」

エピローグ　1（後書き）

何とか更新〜〜明日最終回です。

よろしくお願いしますm（＿＿）m

エピローグ　2

「えっっ……娘！」

驚きのあまりザムゾンの腕から力が抜け、赤ん坊を落としそうになる。ザムゾンは慌てて抱え直した。

腕が大きく揺れ、その動きで大人しかった赤ん坊が火をつけたように泣き出した。

赤ん坊をあやしながらザムゾンはもう一度考えはじめた。アナトールの言った言葉の意味を。いくら魔法が発達しているからといっても、何も無いところから子供を作り出すことは出来ないし、フラスコの中の生成も無理だ。

本当は考えたくないのだが、この子の存在が示すことはひとつだ。アナトールが女性と関係したという事。彼が娘だというのが本当ならば、その時期はザムゾンと再会した後のことだ。

そして多分それは事実だろう。

アナトールの持っていた力と同じ性質のものを腕の中から感じる。小さな愛らしい存在が、ザムゾンの中から複雑な気持ちを引き出していった。

そんなザムゾンの暗い気持ちとは逆に、腕の中の赤ん坊は再び機嫌を直し、はしゃぎ始めた。赤ん坊の小さな手がザムゾンの指を掴み、自分の口元に運ぶ。小さな唇が開き、ザムゾンの指を飲み込んだ。

ちゅっちゅっと音を立てながら、小さな手で周囲を押す動作をして、ザムゾンの指先を懸命に吸っている。乳を求める動作。

本能が成せる動きだと判っているが、まるでこの赤ん坊の母親にでもなった気分だ。

小さき存在への愛しさが、ザムゾンの中で生まれ溢れてくる。
子供には何の責任はない。それだけは確かだ。
心を決めて赤ん坊から視線をアナトールへと移す。頭は混乱していてまともに考えられないが、何か理由があるはずだ。せめて彼の口から事情を説明して欲しかった。
アナトールは強張った表情をしてザムゾンを見つめ返した。
「私のことをどう思おうが構わないが…お前には娘の世話をお願いしたい。約束してくれただろう？」
念を押すようにアナトールは言った。
突き放したような言い方にカチンと来る。
そんな約束しただろうか。記憶にはない。
「僕そんな約束事してません」
荒々しい気持ちのまま、叫ぶようにザムゾンは言った。大声に驚いたのか、赤ん坊は目を丸くして動きを止め、次の瞬間には激しく泣き出した。ザムゾンは慌てて赤ん坊をあやす。
「ごめん。ごめん…ね。君を怒ったんじゃないからね」
必死になって赤ん坊をあやすザムゾンを見守り、アナトールの目から緊張が溶けていく。自然と口元が笑みの形になる。
次に彼の口から出た言葉はさっきとは打って変って穏やかな色をまとっていた。
「そうだな。そういう言い方はしなかった。言い換えよう。キルシュの世話だ。それならば約束しただろう」
「キルシュ？そうなの？」
「ええ。唄う鳥は代替わりしたわ。力は新しい唄う鳥へと引き継がれた」
美しい女性の声。声の方向を向くと、椅子の背もたれの上に置物のように小さな竜が乗っていた。彼女は翼を広げて羽ばたく。宙を舞い、小さい円を書くように飛ぶと、ザムゾンの肩の上に舞い降りる。
肩に留まったキルシュの重量は極軽い。腕の中に赤ん坊を抱えて

いるからなのか、木の葉のような何かが触れた感覚があるだけだ。
キルシュの名前をきき、ザムゾンは彼女の存在を忘れていたことに気がついた。
アナトールとの再会を自分がどれだけ楽しみにしていたか気がつき、彼に特別な想いを抱いている事を痛感する。だからこそ、こんなにも心が乱れる。だが、その事実を知ればキルシュは機嫌が悪くなるだろう。
「キルシュ。久しぶり。元気だった？」
「まぁまぁだわ。この子と私はとても相性がいいみたい」
軽く挨拶をすると、機嫌よく鷹揚にうなづきまた舞い上がる。良かった。拗ねていない。彼女はさっき居た椅子の背もたれに留まる。お気に入りの場所なのかも知れない。
気持ちが他に移ると、熱くなっていた頭が冷えてくる。前会った時に言っていたアナトール意の言葉を思い出した。
「もしかして…『霜刃』を手放すというのは、そういう事だったのですか？」
ザムゾンが真っ直ぐ見ると、アナトールは少し淋しそうな目をした。
「そうだ。私の中にあったキルシュの力はもうない。すべてこの子に移譲した」
「では、この子の母親がいるでしょう？その方がシュテラを世話し育てるべきです」
「そうは言われても…もうここには居ないのだ。そこまでは彼女の契約に入っていない」
「契約…？何の…？」
「胎を買った。私の血と力を引き継ぐものを育んでもらうために。お前には理解出来ないかも知れないが…」
「……胎を買うって」
「この子の母は、戦災孤児で身寄りがなく、春を鬻いでいた女性だ」
「居場所がないのなら尚のこと…」

「彼女には心を寄せている男性がいて、その者は莫大な借金があった。自らの身請けの代金も必要だったし…な」
語られる内容は理解出来るが感情がついていかない。買うとか。契約とか。人を人と思っていないやり取りに憤りを感じる。人の命を何だと考えているのだろうと思う。
「そういうわけで、彼女との関係は険悪では無かったし、どちらかと言えば友好的だった。これだけは言っておきたいのだが…彼女とは同じ目的を持った同士以上の気持ちにはならなかった。それだけは信じて欲しい」
話しを聞く限り、この子を護る人はいないようだ。腕の中の存在が重みを増す。
アナトールは自分の娘だというのに、情を感じない表現で語るし。任せておけないと思う。この子には自分しかいない。それだけをザムゾンは深く理解した。
この子は僕が守る。決意が胸の中で熱く灯った
「お前に私達の世話をして欲しい。そうしてくれないと、私はとても困ったことになる。私のした事が許せないならそれでいい。だが、その気持ちを押さえて傍にいてくれないか」
ザムゾンの目が険を帯びると、アナトールの瞳が不安に揺れた。そんな弱々しい姿を見せられると心が乱れる。彼の力になりたいと思ってここまで来たのだ。全てを捨てても彼のそばにいたいから来た。だけど今は、その彼を心から信じて支えたいと思えない。
「私はそう長くはない。お前にそばに居て欲しい」
アナトールの声に熱が篭った。
「……長くない？何を言っているのですか？」
穏やかではない内容に、ザムゾンは怪訝そうに聞き返した。
「唄う鳥でなくなったものは、強力な魔力の後ろ盾がなくなるのだ。生まれ落ちた直後から力のある状態に慣れた体がそんなに持つ訳はない。記録によると平均して四年の余命だ。私の場合は強大な魔力を使うのに慣れているから。更に短いかも知れないな」

アナトールは淡々と語る。そしてザムゾンは気がついた。思いだした。彼にとっては自分の命すらもが軽いのだと。そんな彼が熱を持ち語る言葉はザムゾンに関する事だけだ。ザムゾンの中で掻き消えたと思っていた彼への思いが蘇る。

「……四年で死ぬって。それが判っていて。貴方は」

「国のために若者が沢山死んでいった。それを考えると私は充分に生きたのだよ。これ以上は贅沢というものだ」

『霜刃』の力を手放すこと…つまり自らの命を短くする選択は本人は元より、国で決められた決定事項だ。それに関してアナトールが取れる選択は、ザムゾンが思うよりずっと少なかっただろう。

「僕が一緒にいれば貴方はそれでいいのですか？」

「それで充分だ。お前がそばに居ればそれだけで、私の人生は幸福の中で幕を閉じたことになる」

「貴方は馬鹿だ。僕なんて何の力もないのに。何の役にも立たないのに。最後に僕だけを求めるなんて」

一身に純粋に、自分だけを求められている。

嬉しくないはずがない。最初からそう言ってくれればいいのに。甘い言葉で溶かして、都合の悪いことは小出しにして事後承諾する事だって出来たはずだ。だがそうしなかった。厳しい現実を見せて、全てをさらけ出してから、後の判断をザムゾンへと委ねた。

信じてなければ出来ないことだ。

嘘をつかずそのままを見せてくれる彼だから、そんな彼だから今は信じられる。

「何の力もないなんて、そんな事はない。この私を力ごと受け入れてくれただろう。そんなお前だからいいのだ。私は『呪われた力』と代々呼ばれたこの力を、元来の祝福された恩寵の力へと変えたいと思っている。それにはお前の力が必要だ。一緒にこの子を育ててはくれないか？」

「呪われた力？そんな風に呼ばれていたのですか？」

「残念ながら…私の家系は心が弱い人が多いのだよ。だから力を求

め、得たというのに。安心するどころか、得た力の大きさに恐れ慄いた。我が血族の不甲斐なさは自業自得だが、キルシュに苦労をかけ通しなのが心苦しいな。彼女には感謝したいと思っているのだ。そのためには力を持って良かったと思う後継者が必要だ。こんな風にこの子を護ろうとするお前なら…お前とならば出来ると思っている」

ザムゾンの感覚では納得できないと言っても、同じ価値のなかに自らを置き、不利益なことにも身を投じる者を非難することは出来ない。

外でどんな良い言葉を叫んでもダメだ。一緒に手を携え、変えていくための行動を起こさなければ現実は変らない。

変えていく、未来への希望をアナトールの言葉からザムゾンは感じ取った。

ふと赤ん坊が静かな事に気がつき、腕の中を覗き込む。

彼女は穏やかな寝顔ですやすやと眠っていた。

「この子の名前は？」

「シュテラ」

「星ですか…この子は貴方にとっては希望の星なのですね」

「そう理解してくれて構わない」

返事する声には照れが混じる。情を感じないとさっきは思ったが、単に不器用なだけなのかも知れない。

「僕は貴方のそばに居ます。ずっと。最期まで貴方のそばに」

「ありがとう」

アナトールの声は少し湿っていた。涙をこらえているのかも知れなかった。衝動がザムゾンの中、生まれる。彼に抱きつきたいと思う。だけど腕の中には護るべき存在がいる。

ザムゾンはシュテラを腕に抱いたままアナトールに近づくと、胸に頭をくっつけた。

ザムゾンの気持ちが判ったのか、アナトールは腕の中の赤ん坊ごと自分の胸の中に抱きこんだ。温かい。幸せがザムゾンの中心から

湧き上がってくる。
強くて弱いアナトールと、未来を託された幼子。自分の全てをかけて。二人を守っていこうとザムゾンは思う。
アナトールの成したいこと。成し得ないこと。それを一生かけて達成しようとするだろう。
ザムゾンは幸福に浸りながら、これからの自分の未来をハッキリと感じていた。

エピローグ　２（後書き）

やっと終わりました～！！！！
感無量。

ここまで読んで頂きましてありがとうございます。

やっぱり、いつものようにギリギリな更新時間になりましたが…
いつもの二倍以上のボリュームになったという事でお許しを。

しばらく、『　唄う鳥・嘆く竜　』の過去編が続きましたが、来週からはやっと本編に戻ります。１８禁『ムーンライトノベルズ』オンリーでの掲載となります。
年齢制限のある場所だけで書くのは少し躊躇しますが、どんな表現が相応しいのか考える暇があったら本編を書こうという結論に達して基準の無い場所だけでの掲載に決めました。ヤオイも書く予定なので１８禁じゃないと難し過ぎる。

という事で、来週月曜からは量少なめ毎日更新になります。
初心に戻ってガンバリマス。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6877p/

【　炎の竜と、さびしがりの霜刃　】　「唄う鳥・嘆く竜」シリーズ

2011年6月10日22時40分発行